

二〇〇〇年二月

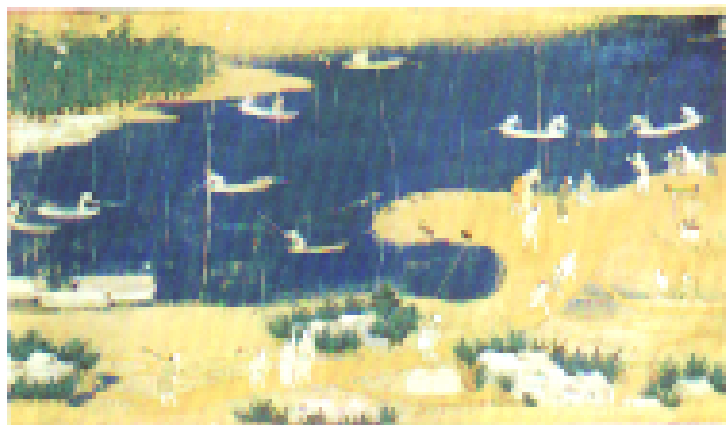
歴史地理学調査報告 第九号別冊
—— 飯沼山円福寺の記録 ——

筑波大学歴史・人類学系
歴史地理学研究室

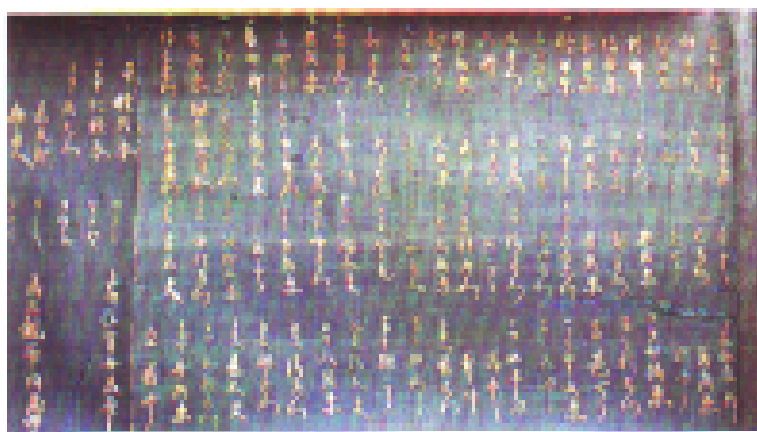
飯沼山円福寺の記録



【图1-1-1】
（北京故宫博物院藏）



〔定山圖（清孫承澤）〕



〔定山圖（清孫承澤）〕



〔定山圖（清孫承澤）〕

大学院生の野外実習を兼ねた教室の銚子調査も、既に四年目を迎えることになった。銚子は第二次世界大戦の空襲により、市街地の多くが焼失し、市内の文化財や古文書資料の多くが失われた。そのため、戦後における銚子に関する研究・調査は、二次史料に依存したものが多かった。銚子を調査地に選択する際、そのことは十分承知のうえで、史料がないならば、逆に歴史地理学の特性を生かして、土地を歩いて過去の痕跡をさがそうと決断したものであった。しかし、調査をはじめてみると、多くの方々のご指導やご後援で、予期した以上の史料が残存することが分かってきた。とくに平成一〇年度には大学院生が補充調査の折、偶然にも円福寺での涅槃図の修復作業に出会った。それを契機に半幡良雄住職のご好意で、円福寺に残る史料調査の機会をもつことができた。我々よそ者が円福寺の史料を閲覧する機会をもてたのは、銚子市文化財審議会委員の永澤謹吾先生、ならびに銚子市公正図書館の高森良文主任主事のご後援もあつてはじめて実現しえたものと推察している。三人の方々に深甚なる謝意を表したい。

ところで円福寺は、銚子の中心部にあり、古来飯沼観音とも呼ばれてきた。坂東三十三所観音霊場第二十七番札所でもある。寺伝では土地の漁夫が海中から観音像を引きあげ草堂に安置したのが始まりという。中世には海上氏一族の庇護を受け、とくに江戸時代以降には多くの参詣客を集めてきた。現在に至る銚子は、この円福寺の北側に発達した漁民と商人の町・飯沼、円福寺から西側に伸びる街路上に発達した新生、荒野などを核として発展してきた。まさに円福寺は銚子の中心に位置し、銚子の発展を見続けてきたといつても過言でない。円福寺には、江戸はもちろんのこと、日本各地や下総・常陸といった近郷の人々から寄進された涅槃図、大仏、絵馬などが多い。これらは単に円福寺の信仰圏を表しているばかりでなく、銚子がどのような地域間関係のもとで発展してきたかを解明する格好の資料である。

今回は、銚子の歴史地理を知るうえで重要と思われる以下の三点の史料を翻刻した。詳細については解題を参照してもらいたい。まず第一は、明暦二(一六五六)年の「飯沼山観世音縁起」である。この史料から、近世初頭における現世利益的な観音信仰のあり方とともに、関西漁民が来住して新しい漁法が伝播しつつあった一七世紀の銚子における人々の生活をひもとくことができる。二つ目は、寛文九(一六六九)年に作成された「釈迦涅槃図」である。寛文期は銚子の町が発展を始める時期と考えられるが、この涅槃図には銚子と関係のある地域の多くの施入者名が刺繍されており、銚子がどのような地域間関係のもとで発展の基礎を築いたかを解明する手がかりがえられるものと考えられる。もう一つは、宝暦二(一七六二)～安永六(一七七七)年にかけての「本堂再建記録」である。観音堂再建への寄進のあり方から、一八世紀後半における銚子の社会・経済・文化の一端を読みとることができ、銚子と江戸をはじめとする他地域との関わりを明らかにすることができる。

前号でも述べたように、銚子は、江戸はいうまでもなく、関西・関東や東北の諸地方など、さまざまな地域と複雑な関係をもちながら発展を遂げた。これらの史料を読み解くことで、銚子の発達過程の特色ばかりでなく、江戸時代における経済や社会のあり方を再検討することができるかもしれない。今後、我々もこれらの史料の活用而努力したいと考えているが、多くの方々の調査・研究の便に供したいとの意図から史料集を作成した。これらの史料が多くの方々に利用され、銚子の研究の進展につながるならば、我々の望外の喜びである。

この史料集の作成には山澤 学（現筑波大学技官）、松杉力修（現島根大学講師）、藜沼綾子（筑波大学歴史・人類学研究科大学院生）の三氏が担当したが、史料調査の際には、お忙しいところにもかかわらず、元筑波大学教授の田中圭一先生に種々ご指導をいただいた。現地調査や史料の整理には高橋珠州彦氏（筑波大学環境科学研究科大学院生）や筑波大学人文学類の学生諸氏の助力があった。最後に、史料閲覧の機会を与えられ、それらの公表をお許し下さった平幡良雄氏、さまざまにご支援・ご教示をいただいた永澤謹吾・高森良文の上記の三氏に対して、改めて御礼申しあげる。

二〇〇〇年二月

石井英也

飯沼山円福寺の記録 目次

口絵

はじめに

- 一 飯沼山観世音縁起(明暦二年)……………翻刻・解題 山澤 学……………1
- 二 釈迦涅槃図(寛文九年)……………翻刻・解題 船杉 力修……………6
- 三 本堂再建記録(宝暦一二年、安永六年)……………翻刻・解題 蓼沼 綾子・山澤 学……………23

凡例

本史料集は、これまで未紹介の千葉県銚子市馬場町に所在する飯沼山田福寺所蔵の史料のうち、画像をともなう記録を翻刻したものである。翻刻にあたっては、それぞれ冒頭に解題を付すとともに、原文書の意味を損じない程度において以下のように扱った。

- ① 史料には適宜、読点および並列点を付した。
- ② 漢字は原則として当用の字体に改めた。
- ③ 俗字・略字・異体字等は当用の字体、または正字に改めた。
- ④ ニ・而・者・江・茂などの助詞は活字のポイントを落とすた。
- ⑤ 虫喰・欠損などで文字が判読できないとき、その字数を推定して「一、あるいは「」で示した。
- ⑥ 冊子・卷子の題箋は「」で囲んで示した。
- ⑦ 抹消・訂正・補入が単なる誤字・誤句の場合は「」で囲んで示したものを記し、特に必要と思われる場合は「」で囲んで示した。
- ⑧ 画像がある場所は「数」によって示し、写真を別掲して示した。
- ⑨ 史料はそれぞれ形状に特徴があり、それらの翻刻時の扱いについては個々の解題を御参照いただきたい。



田福寺観音堂

杉原康定、1908、『銚子案内』、中村書店より引用

一 飯沼山観世音縁起 (明暦二年)

解題

円福寺は新義真言宗の古刹である。その本堂が飯沼観音を祀る観音堂である。本史料は、飯沼観音が寛永年中(七一七-七二四)に海中より出現し、人々に神恩を享せしめしむる縁起を記し、その巻物である。明暦二年(一六五二)六月の作で、絵師狩野友信(正政)による六段の詞書と五枚の絵から成る。本縁起には、飯沼村の領主であった松平外記忠直によつて志進されたという奥書がみえる。破損部が散見され、後世の手によるなすり書きが一部みられる。

縁起によれば、飯沼観音は、奈良・長谷寺の観音と同じ木から彫られた一体である。夢の中で託宣を受けた飯沼村の漁夫が、井田子(潮来)近くの牛堀村(茨城県行方郡潮来町)に住む漁夫とともに、綱を引いて海中から引き上げ祀つた。さうして円福寺が建立され、鎮守も長谷寺に習つて竜蔵権現(現在跡地社)と称した。

縁起によれば、境内にある観音堂、摩訶堂、重宝の由来や利益について説かれる。飯沼観音の利益については、普門品(法華経第二五品)に拠りながら、戦時の敵、盜賊、飢害、水難、火難、無実などの災難除けや、子宝の祈願がみえる。また、現存していない摩訶堂は、その名称から摩訶念仏系の行者との結びつきを想定できるが、そこには、観音を引き上げた飯沼の漁夫の木像を祀り、「をこの節」として流行病を除ける信仰があったこと、第四の重宝とされる雲加持の五穀は、諸雨霽の道具で、旱害からの救いを求める百姓の信仰に関わるだろう。円福寺はさまざまな現世利益の信仰を集めていた。重宝をみると、新義真言宗の寺院に相応しく、弘法大師の自作の地藏菩薩・



「飯沼山観世音縁起」第1紙

如意輪観音の像や法影、長谷寺に由来する中津姫の守護仏である阿弥陀三尊像があげられている。他に、三蓮白蓮の法華経を既述した摩訶堂の存在をよめること、円福寺自体が本末編成によつて新義真言宗に定まる以前から、さまざまな信仰を普及する宗教者と結びついで存在し、いたことをうかがわせる。絵は、狩野探幽によつて確立されたばかりの狩野派の画風を引く。当時、関西漁民が来住し、新しい漁法も伝播しつつあった銚子の状況を考えると、描かれる河海に生きたる人々のようすは決して虚構の域にとどまるものではないと思われる。観音堂と円福寺本坊の間には町屋も描かれている。圖像学的検討を加えることにより、一七世紀中葉の銚子を考察することが可能となるう。

(山澤 学)

(箱書)

観音縁起

一幅

(端裏題箋)

飯沼山観世音縁起

(第一段)

下総国海上の郡三崎の庄飯沼山円福寺ハ東国無双の靈地也、東は蒼海
まんくとして日月も海中よりさしのほるかとうたかはる、みち来る壇ハ無
しゆのさいかうをあらひ、南もおなし海上にて白浪を花かどあやしまる、打
よする波に無明の眠をさます、西は広野ひやうとして、人馬絶る事な
し、北ハ常陸をさかひに入海有て、往還の船充滿せり、偏に福寿安泰仏法繁
榮の地なり、抑当寺の蓋觸は、元正天皇の御宇、養老年中の御草創として、
本尊ハ十一面観音大慈大悲の誓願なり、そのかミ海中より夜なく金色の光
□して、此浦を照す事有、諸人奇異の思ひをなせり

1

(第二段)

ある夜、所の浦人に、夢中に白髪のお翁来て、告て曰、我は是和州長谷寺の
観音と一木両尊たりといへとも、彼地に縁なくして童宮に入るはちいの此

海中にあり、汝いそき常陸国へ行、井田子の近郷牛堀村の漁夫を頼、はやく
我を曳上よと、あらたなる靈夢にまかせて、あやしき事とおもひながら、ふ
ねに打乗て、彼地へ行侍りぬ、爰に又井田子の獵師も同じ夜の夢に告あり、
是も曳網を持、下総国いひぬまの浦にいたり、氣をなすへしと、正しきをし
へにしたかひ、飯沼へ行けり、誠観音の利生あらたにして、二人の者おなし
海上にして行達ぬ

2

(第三段)

何となく夢物語仕出しけれハ、たかひにありし夜見し夢にすこしもまかふ所
なし、是は不思議の事なりとて、それより彼獵師をいさなひ、飯沼に帰りて
網をひかせければ、辱も大慈大悲の薩埵ハ長さ式尺あまりまはり、壹尺ほと
の馬腦石を脇粹給ふを曳上奉る、浦人心肺肝にめいし感涙袖をうるをせり、
時に寿雲天にたなひき、長さ一寸あまり八木ふりぬ、是大悲救世の観音円満
福德の宝命を給とて諸人よろこびをなせり

3

(第四段)

誠希代のためしなれば、大伽らんを建立して、飯沼山円福寺と号す、則鎮守
をすゑ奉るに、和州長谷寺の鎮守は滝蔵の権現と申侍き、当寺御本尊長谷と
一木同体の両尊にておはします故に、当寺の鎮守をも滝蔵権現とあかめ奉る、
其後御宮殿を建立催せし時、一人の比丘尼都より御宮殿を持下り、御本尊を
納奉らんとするに、仏の御長少のひさせたまへは、御内陳に入奉る事不叶け
り、然るに彼比丘尼涙をなかし、我大願を起して都よりはるく持下る甲斐
もなく仏の宮殿に遷せ給ぬことそほむなけれとて、我宿障のつたなき事を歎
き悲しミけれハ、其時御本尊光明か、やくとして靈香袖に薫し、ミつから御

宮殿にいらせたまふ、去とも御長のひさせたまふゆへ正面に居直らせ給はざるにより、今に至る迄、参詣の人うしろより拜礼すと云々

4

(第五段)

また、本堂よりうしろにあたり、融通堂とてこれ有、是はむかしの御仮屋成しを海中より本尊曳上奉る漁夫を木像となして納入せしむるところに、癩病の災難に祈をかけ申族、かならず其しるしあらずといふ事なし、爰におゐて近隣近郷の黎民をこりの翁とこれを名付申也

就中、当寺相伝の御重宝其数不少、第一、馬鬣石、是は本尊海中より脇粹給てあらせたまふ石也、凡夫の目にみるに其長短さたまらず、手にとるに其軽重をなしからず、或ハなかく、あるひは短く、或は軽、或ハ重し、其色時によりて異なる色を顯す、寔にふしきの宝物也、第二、老寸の八木、是も本尊竜宮より上らせたまふ御時虚空より一七日の間叢のことく降侍しを、二粒残し置、今に是あり、第三、竜宮より鈴ひとつ、竜灯に指そへ、本尊の仏閣に侍ふ、これも当寺に有、其例として末世とは云とも、時々竜灯あかれり、第四、雲加持の五結とてそのかみより、当寺の宝物となれり、是は請雨経をおこなふ道具也、第五に弘法大師の御作、白檀の地藏菩薩、第六に是も大師自作の御影、長さ老寸五分、第七、中将姫のまもり仏阿弥陀の三尊、第八、正直の三遍宝珠、第九、高麗より不思議の事ありて観音懺法の御經一卷納奉る、是は赤紙金字也、第十に如意輪観音、弘法大師の御作なり、第十一に日蓮真筆の法華經一部一卷、長五寸にして、切目四寸也、右の宝信心の輩所望にまかせおかせ奉る

5

(第六段)

夫観音の利益は、日の天下を照し、月の水にやとるかことし、三千世界に於て身を現せずといふ所なし、此故に若人軍陣にあひ戦ふとき、一心に観音の名号を念すれば、則敵陣退散して兵杖の難をまぬかる、若人山野を過るとき、盜賊にあひて忽に害せられんとする時、一心に観音の名号を念すれば、則賊難をまぬかる、虎狼毒蛇の難もまたしかり、若人海上を渡るとき、忽に大風にあひて舟を漂動するとき、一心に観音の名号を念すれば、則水難をまぬかる、若人大火にあひて忽に焼失んとする時、一心に観音の名号を念すれば、則火難をまぬかる、若人罪なくしてとらはれ人となり、其身をつなかる、時、一心に観音の名号を念すれば、則無実の難をまぬかる、若人世継の子なくして男子を求る時、一心に観音を恭敬礼拝し奉れば、すなはち福德右恵の男子を生ず、女子をもとむる時も又しかり、すへて観音の仏力不可勝斗、委は普門品に説かことし、雖然、今の世に観音を念してむかしのことく勝れたる利生のある人ハ稀也、是仏の答にあらず、人々信心のなき故也、日夜朝暮他念なく信仰し奉るに於ては、貴賤男女をあらはず、今生にては全榮耀のまゆをひらき、福德家門に満、来世にてハ長く九品の蓮台に住し、無比の歡喜をなし、二世安樂の境界にいたるへき者也

(奥書)

狩野友仁

明暦式内申歳六月十八日

正成書図之(花押)

(異筆)

〔松平外記從五位下源朝臣

忠宜寄進之〕

6



3



4



3



5 (左半部)

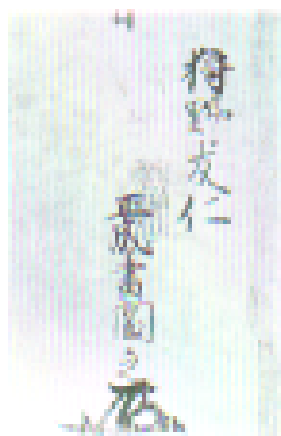


图 1 松友仁氏藏御札



图 2



图 3



图 4 御札の祭り

二 釈迦涅槃図（寛文九年）

解題

釈迦涅槃図とは、釈迦入滅を描いたもので、釈迦が沙羅双樹の下で光背をつけずに頭を北に横たわり、そのまわりには、仏弟子のほか、多数の菩薩・大龍・動物などが慟哭する姿を描いている。釈迦が入滅した二月一日に修せられる涅槃会で使用される。円福寺でも、毎年二月一日に、円福寺本堂（観音堂）にこの釈迦涅槃図が掲げられる。

縦三五〇センチメートル、横二六五センチメートル（表具は含まず）の掛幅装で、かなり大きい。図は各種の色糸で刺繍されており、こうした刺繍涅槃図は国内では例が少ない。平成三年（一九九二）に千葉県指定文化財となった。千葉県内では、富津市竹岡の浄土宗松翁寺に万治元年（一六五八）の刺繍涅槃図（県指定）がある。図様としては標準的である。図に表された動物の数は約五〇と普通だが、会衆の数は一〇〇名を越え、他と比べると多い。

平成一〇年（一九九八）の修復時に発見された軸木の銘によれば、涅槃図は文化十一年（一八一四）一月と昭和二年（一九二七）八月に修復されている。昭和二年の修復以前には、画面の左右と下辺に紺絹金字で縫い上げられた銘が添えられていたが、現在は卷子に改装されて保管されている。それには、涅槃図製作の由来や製作に協力した寄進者の名前が記されている。この由来書によれば、寛文九年（一六六九）に縫物師の京都の次郎左衛門・清右衛門・喜兵衛、江戸の七郎兵衛によって製作された。本願は紀州の又右衛門・新兵衛、江戸の喜右衛門であった。

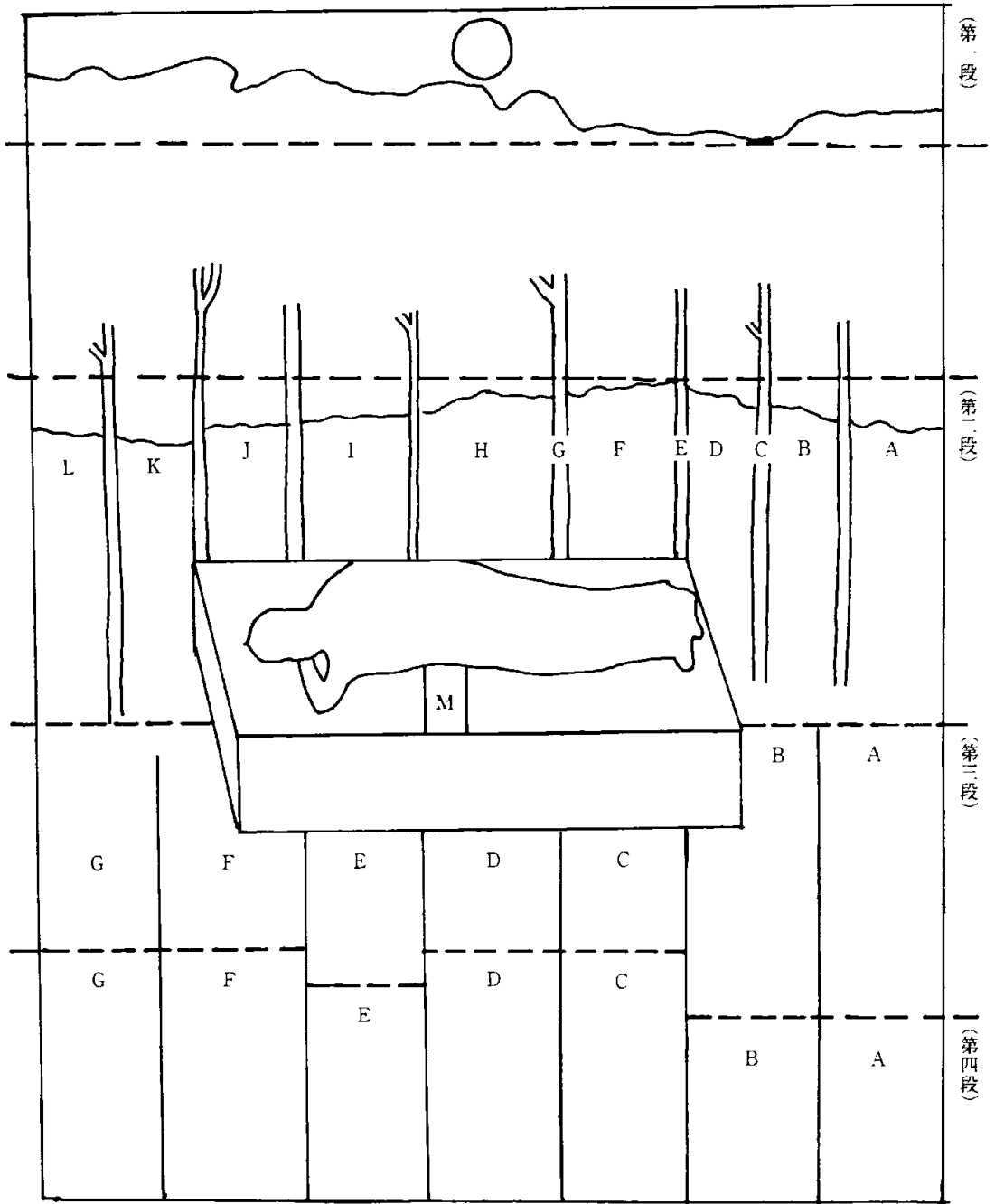
この涅槃図で特筆されるのは、図の各部分に多くの人名が刺繍されている

ことである。その分布は、飯沼・新生・荒野・今宮・高神といった銚子周辺を中心として、海上郡・匝瑳郡といった九十九里浜一帯、常陸・上総の漁村、仙台・伊勢・紀州・和泉・摂津・讃岐にまでわたっている。一七世紀後期は、干鰯生産のために近畿地方から漁民の来住する地域として、発展を始める時期であったことから、銚子が港町として発展する過程を検討する上で重要な資料であるといえる。図の中央に描かれる釈迦は、飯沼村の田中玄蕃（ヒゲタ醤油の創始者）の寄進によるもので、玄蕃は文化十一年の修復の際にも寄付主となっており、涅槃図製作に大きく関わったと考えられる。

図には「為二親菩提」という記載が多くみられ、両親の菩提を弔うための寄進が多かったことが指摘できる。また、由来を記した銘には、涅槃図を当山に奉納できたのは、飯沼親音の威徳のためであると記されている。これは、飯沼親音が坂東三十三ヶ所霊場の第二十七番札所であり、開帳の際には多くの参詣客が訪れていたことが背景にあると考えられる。涅槃図の検討によつて、円福寺・飯沼親音をめぐる近世初期の信仰の在り方についても考察することができよう。

本史料は、原態のまま翻刻することは紙面の関係上難しいため、便宜上、次頁に示した概念図のように一応の区画を設け、その各区画毎にその銘を翻刻することにした。また、本来一体であった釈迦涅槃図由来書の卷子についても続けて翻刻した。ただし、成巻の際にはすでに元の順序は不明となっており、破損の跡も見受けられることから、各料紙毎に示し、諸賢の判断を仰ぐことにした。なお、今後の研究に資するために、地名の現地比定を行い、注に示した。末尾には、昭和二年の修復時に揮毫された軸木の修復銘についても掲げたので、あわせて御参照いただきたい。

（松杉力修）



釈迦涅槃図のトレース図

【釈迦涅槃図】

(第一段)

仙台⁽¹⁾ 舟十二艘 船頭衆

為二親菩提上なかへ⁽²⁾ 主水

為ソウタン菩提上なかへ 主水

為二親菩提かみ村⁽³⁾ オキク

逆修お竹辺田村⁽⁴⁾

為逆修高上村⁽⁵⁾ おいね

為二親逆修於竹縫之

為逆修行内村⁽⁶⁾ おとら

為二親菩提 高上村 辻一郎兵衛内

峰照院殿布衣不迷源水居士 御為川名清兵衛

為二親菩提木戸村⁽⁷⁾ 兵庫や佐兵衛

印可為師恩長惠縫之

(1) 現在宮城県仙台市。(2) 上水井村、現在海上郡飯岡町上永井。

(3) 不明。(4) 現在銚子市春日町。(5) 現在銚子市高神東町・高

神西町。(6) 現在海上郡飯岡町行内。(7) 現在匝瑳郡光町木戸。

(第二段)

(A)

為浄光・宗海・浄誦・妙法・妙參 施主勢州四日市⁽¹⁾ 黒川吉左衛門・同内義

為常岩・貞心・宗沢菩提 沢井久兵衛

阿弥陀院⁽²⁾ 道海為菩提

道照・妙鑒・妙夏 新井⁽³⁾ 右馬助為菩提

為道看菩提・為祖母逆修・為母逆修 施甚左衛門

為道栄・妙蓮菩提 飯沼⁽⁴⁾ 藤左衛門

為道金・妙金菩提・定玠為菩提 尊乘院⁽⁵⁾

為実源徹菩提・為浄性信士 飯沼 市郎左衛門

(B)

讚岐ア子村⁽⁶⁾ 三左衛門 菩提二親為

(C)

為弘清菩提 飯岡村⁽⁷⁾ 加左衛門 飯岡村地下中

道西・妙讚為菩提 飯沼 田中善兵衛

浄本逆修為菩提 飯沼 渡部藤八郎

妙徳為菩提 飯沼 お松

(D)

道了・妙清為菩提 飯沼村 彦左衛門

為月閑宗屋菩提 依右衛門内義

為逆修 新井 庄兵衛

妙春為菩提 親田村⁽⁸⁾ 古川与右衛門

(E)

飯岡村延沢久右衛門 為逆修縫之 同内儀一休縫之

(F)

権大僧都法印行範

常林・妙貞親子為菩提 吉崎村⁽⁹⁾ 石橋為右衛門 内儀於刀

為青月了含・称西信士菩提 八日市場⁽¹⁰⁾

(G)

道喜・妙讚為菩提 飯沼 嶋田孫右衛門

(H)

逆修 高上村 白戸勘兵衛 同内儀 高上村中

為妙善菩提 新井村 内匠

逆修 高上村 白戸内藏之助 同内儀 妙清

為道海菩提 新井村 おき

大新舟 泉屋五良右衛門 為逆修

逆修志いな内(1)おなつ

為逆修同村 かせ新右衛門

(I)

為二親 鎗木(2)大田源三郎

為六親 岩舟村(15)齊藤勘右衛門

市宮(14)新川八右衛門

為二親菩提 新井村 阿辺孫左門

真月 妙順

御仏 妙立

妙喜

為賢覚菩提 部原村(16)貝塚伝兵衛

(J)

為二親菩提 舍利村(16)岡野仁兵衛

紀州広(17)六左衛門・九右衛門 為逆修

為池月菩提 アライ村(18)

為宗看菩提 豊後屋七兵衛

(K)

為常善・妙善菩提 三崎村(19)藤兵衛

同村 清左衛門 為宗鏡菩提

同村惣男女為菩提 本願四郎右衛門

為二親菩提 二郎兵衛

為善光・妙心・妙満菩提逆修 足洗村(20)門口芳野清左衛門

(L)

為二親菩提 尾垂村(21)伊藤又左衛門

為二親菩提 同村 伊藤七郎左衛門

為保源・妙感菩提 川辺村(22)及川七郎兵衛

為常情菩提 同村 及川八郎兵衛

地福寺(23)第一坊

為妙要菩提 野尻村(24)

為二親菩提 尾垂村 伊藤一郎左衛門

(M)

釈迦如来之施上 飯沼村 田中玄蕃 為逆修 同常業・妙暎

(1) 現在三重県四日市市。(2) 円福寺塔中。(3) 新牛村、現在銚子市新生町。(4) 飯沼村、現在銚子市東町・飯沼町ほか。(5) 円福

寺塔中。(6) 現在香川県木田郡庵治町。(7) 現在海上郡飯岡町飯岡

町。(8) 現在銚子市親田町。(9) 現在八日市場市吉崎。(10) 八日市

場村、現在八日市場市イ。(11) 椎名内村、現在旭市椎名内。(12) 鎗

木村、現在匝瑳郡干潟町鎗木。(13) 現在夷隅郡大原町岩船。(14) 現

在長生郡一宮町一宮。(15) 現在勝浦市部原。(16) 現在茨城県鹿島郡

波崎町舍利浜。(17) 現在和歌山県有田郡広川町広。(18) 新井村、現

在銚子市新生町。(19) 現在銚子市三崎町。(20) 現在旭市東足洗・西

足洗。(21) 現在匝瑳郡光町尾垂。(22) 現在匝瑳郡野栄町川辺。(23) 不

明。(24) 現在銚子市野尻町。

(第三段)

(A)

為忠慶日立逆修 為妙暢靈尼菩提 施主川名清兵衛

為西光則見妙如道実寿情菩提 山出六左衛門

為道満菩提 三崎村 七郎左衛門

飯沼 新兵衛内儀 為逆修

為逆修菩提荒野⁽¹⁾ 藤左衛門

為一雲・智清・欣鉢・妙円菩提 今宮⁽²⁾ 利左衛門

為道本菩提 四郎左衛門

為二親菩提 甚五

(B)

為二親菩提 玉井清安

為妙宗・宗源菩提 アマノニ右衛門

道明・妙満 為菩提 飯沼村 伊藤清左衛門

道宿・妙知代々東性院⁽³⁾

為二親菩提 石橋団左衛門

(C)

為道讀菩提 やかた村⁽⁴⁾ 海保権右衛門 逆修おとの

為二親菩提 西宮⁽⁵⁾ おくま善兵衛

為二親菩提 同妙心・ケイカン淨貞・リンカン妙貞

蓮沼村⁽⁶⁾ 滝川十左衛門・同内義

(D)

為逆修 甚右衛門

(E)

上総国やかた村 海保兵右衛門 為二親菩提也 覺心禪定門 同内方逆修

為宗心妙栄菩提 徳右衛門

(F)

為二親菩提 舍利村 溝口弥兵衛

為二親菩提 同村 田迎権介

為性蓮禪定尼菩提也 荒野村 於夏

為淨安・妙善菩提 矢田部村⁽⁷⁾ 原野十二郎

為道明・妙鏡菩提 同村 長谷川五郎兵衛

為道秋逆修 同村 安藤七兵衛

(G)

為月光秋円 父勘右衛門

為二親 塩津兵衛

為妙蓮菩提

(1) 荒野村、現在銚子市中央町・双葉町ほか。(2) 今宮村、現在銚子市今宮町・若宮町ほか。(3) 円福寺塔中。(4) 屋形村、現在山武郡横芝町屋形。(5) 現在兵庫県西宮市。(6) 現在山武郡蓮沼村イ・ロ・ハ・ニ。(7) 現在茨城県鹿島郡波崎町矢田部。

(第四段)

(A)

飯沼村庚申待衆

新兵衛・四郎左衛門・内藏助・源兵衛・源之丞・新左衛門・長右衛門・久左衛門・次右衛門・七兵衛・三郎兵衛・係右衛門・源左衛門・宗兵衛・勘

左衛門

ユワサ⁽¹⁾ 網中吉兵衛

ユワサ 網中徳兵衛

ユワサ 網中佐兵衛

サカイ⁽²⁾ 網中善兵衛

ユワサ 網中善右衛門

ユワサ 網中太郎大夫

スワラ⁽³⁾ 網中又四郎

十左衛門

コサ⁽⁴⁾ 茂兵衛

二郎平次

ユワサ 二郎左衛門

ユワサ 長兵衛

勘六

サカイ 長兵衛

新四郎

才三郎

ユワサ 五郎右衛門

フケイ⁽⁵⁾ 清右衛門

フケイ 万右衛門

フケイ 与茂三郎

西宮 十兵衛

フケイ 文左衛門

ラワリ⁽⁶⁾ 清兵衛

フケイ 与右衛門

フケイ 九郎兵衛

ヒタカ⁽⁷⁾ 長兵衛

為妙宣道清二親 四郎右衛門

(B)

為二親菩提 松本村⁽⁸⁾ 宮内五郎右衛門 同内儀

為一親菩提 松本村 宮内八郎左衛門 同内儀

為二親菩提 本城村⁽⁹⁾ 宮内孫右衛門 内儀

おはま⁽¹⁰⁾ 地下中

為妙運菩提 おやた村⁽¹¹⁾ 茂右衛門・権右衛門

おやた地下中

とこいた⁽¹²⁾ 地下中

やき村⁽¹³⁾ 地下中

きやうち村⁽¹⁴⁾ 地下中

平松⁽¹⁵⁾ 地下中

よこね⁽¹⁶⁾ 地下中

はきそね⁽¹⁷⁾ 地下中

三川そね⁽¹⁸⁾ 地下中

三川村しゆく中⁽¹⁹⁾

野中村⁽²⁰⁾ 地下中

東あしあらい⁽²¹⁾ 地下中

西あしあらい⁽²²⁾ 地下中

椎名内村⁽²³⁾ 四郎左衛門母為逆修 同四郎左衛門逆修

椎名内村中

地口村中⁽²⁴⁾ 吉崎村中⁽²⁵⁾

長谷村中⁽²⁶⁾ 野手村中⁽²⁷⁾

木戸村中⁽²⁸⁾ 中やり村中⁽²⁹⁾

にたま村中⁽³⁰⁾

(C)

- 為宗殿・妙空菩提 地口隼人
- 為二親菩提 鑛木村⁽³¹⁾ 半山忠兵衛
- 為二親菩提 同村 高安三右衛門
- 為二親菩提 同村 太郎右衛門
- 為熱田孫右衛門菩提 逆修同村チヨラウ 鑛木地下中
- 為二親逆修 大寺村⁽³²⁾ 八木源兵衛 同内義
- 為妙秋菩提逆修 高村⁽³³⁾ 伊藤十郎左衛門
- 為妙秀菩提 大寺村 八木一郎左衛門
- 為二親逆修 岩田村⁽³⁴⁾ 山口十兵衛
- 為宗源菩提 八日市場⁽³⁵⁾ 山崎長右衛門
- 為妙源菩提 同人
- 為妙養・宗心菩提 同人
- 為妙迎菩提 八日市場大河惣右衛門
- 為慶祐菩提 同内儀
- 為二親六親菩提 八日市場大河宗鋪
- 為二親六親菩提 同所 同内儀妙纂
- 為二親六親菩提 同所 斎藤二郎右衛門
- 為二親菩提 同内儀 栄正信女
- 為二親六親菩提 同所小作又右衛門
- 為了岐菩提 同所大河平三郎
- 為証善真宝菩提 同所大河六郎右衛門内儀
- 為淨妙菩提 富谷村⁽³⁶⁾
- 為果舜菩提 籠辺田⁽³⁷⁾ おひつ
- 為二親六親菩提 同村布施源左衛門
- 籠辺田村男女念仏衆
- 為二親 い七⁽³⁸⁾ 市兵衛

(D)

- 利右衛門
- 妙惣為菩提 シイノウチ⁽³⁹⁾ 遠藤清右衛門 同内儀せん
- 新井庚申結衆 新井庚申結衆
- 見識房 孫左衛門
- 民部 左右衛門
- 給右衛門 伊右衛門
- 四郎左衛門 次郎右衛門
- 長兵衛 六郎左衛門
- 長左衛門 六左衛門
- 仁兵衛 庄右衛門
- 次郎右衛門 与右衛門
- 助左衛門 与兵衛
- 孫左衛門 久右衛門
- 吉右衛門 弥右衛門
- 善左衛門 助右衛門
- 左兵衛 平右衛門
- 惣右衛門 惣右衛門
- 甚右衛門 甚右衛門
- 為不肖君命遂武略高名也 沢井長八
- 庚中間寺中衆
- 大寺 八木権右衛門
- 飯沼庚申符結衆
- 甚左衛門・久右衛門・四郎兵衛・甚五郎・新右衛門・庄右衛門・宗叶・二
- 郎右衛門・五郎兵衛・太左衛門・源五左衛門

(E)

- 為逆修 アシト村⁽⁴⁰⁾ 女郎

為二親 妙宗・善宗菩提

高村 伊藤十右衛門

為善感・妙光・妙執菩提

高村伊藤平六左衛門

淨満・妙満為二親菩提也 新井村ソクマ

岩舟佐次右衛門

(F)

新井村念仏衆

オセシ オマツ

ミノ チヨロウ

オネイ オチヤウ

オフク オマツ

オクニ オクア

オマツ オトウ

為二親菩提 理右衛門

(G)

為二親菩提妙果菩提 飯沼 源兵衛

(後筆)

[本浄安熙・白浄貞薫 南 善右衛門両親]

長塚村中 (41)

足川村中 (42)

川部村中 (43)

小屋村中 (44)

柏田村中 (45)

このつみ村中 (46)

尾垂村中 (47)

府馬村中 (48)

- (1) 現在和歌山県有田郡湯浅町湯浅。(2) 現在和歌山県日高郡南部町堺。(3) 現在和歌山県有田郡湯浅町栖原。(4) 現在和歌山県東牟婁郡古座町古座。(5) 現在大阪府泉南郡岬町深江。(6) 現在愛知県。(7) 現在和歌山県日高郡。(8) 現在銚子市松本町。(9) 現在銚子市本城町。(10) 小浜村、現在銚子市小浜町。(11) 現在銚子市親田町。(12) 常世田村、現在銚子市常世田町。(13) 現在銚子市八木町。(14) 現在海上郡飯岡町行内。(15) 平松村、現在海上郡飯岡町平松。(16) 横根村、現在海上郡飯岡町横根。(17) 萩園村、現在海上郡飯岡町萩園。(18) 現在海上郡飯岡町三川(曾根)。(19) 現在海上郡飯岡町三川(上宿・下宿)。(20) 現在旭市野中。(21) 東足洗村、現在旭市東足洗。(22) 西足洗村、現在旭市西足洗。(23) 現在旭市椎名内。(24) 不明。(25) 現在八日市場市吉崎。(26) 現在八日市場市長谷。(27) 現在匝瑳郡野栄町野手。(28) 現在匝瑳郡光町木戸。(29) 現在旭市中谷里。(30) 現在旭市仁玉。(31) 現在香取郡千湯町鑄木。(32) 現在八日市場市大寺。(33) 現在八日市場市高。(34) 不明。(35) 八日市場村、現在八日市場市イ。(36) 現在八日市場市口。(37) 現在八日市場市ハ。(38) 伊勢国、現在三重県。(39) 現在旭市椎名内。(40) 網戸村、現在旭市イ。(41) 現在銚子市長塚町。(42) 現在旭市足川。(43) 現在匝瑳郡野栄町川部。(44) 現在匝瑳郡野栄町堀川。(45) 現在匝瑳郡野栄町栢田。(46) 木積村、現在八日市場市木積。(47) 現在匝瑳郡光町尾垂。(48) 現在香取郡山出町府馬。

【釈迦涅槃図由来書】

(第一紙)

妙有 為二親菩提 妙月 宗医 道法 西□
 智法 順清 道西 字誓 鶴女 妙慶 妙□
 妙清 道鑿 宗栄 妙岸 妙有 ヲセン 妙□
 妙仙 春信 妙円 円音 妙菊 宗円 茂兵衛
 タンシユ 妙倫 長左衛門 クマ 五郎右衛門 妙慈 妙淨
 妙執 妙讚 日淨 清光 道任 マス 道性
 妙源 妙見 久岸 性梵 妙善 六右衛門 カメ イノ
 道王 為二親 オ六 虎之介 勘左衛門 ワカコ 五兵衛
 權兵衛 ハル オマ 妙誉 道倫 妙保 マツ セン イノ
 妙休 ナヘ オツウ ナヘ 蓮妙 サル 逆修 マツ 二親
 妙久 ヒツ クニ タケ マツ サル 道三 妙参 源空
 妙蓮 妙空 蓮空 妙全 淨蓮 妙好 道宗
 妙心 子、 ツル マス 妙信 妙旬 道依 栄賢
 専栄 栄弁 道源 妙栄 道満 妙教 子、
 妙林 妙養 栄存 妙輪 淨西 妙養
 日理 妙仙 ウシコ 為二親 同妙空 六兵衛 逆修

(第二紙)

法印定恵 法印尊恵 法印可海 法印淨恵
 權大澄恵 權大慶恵 法印長慶 法印聖恵
 道安 妙慶 妙春 道勲 妙法 宗清 妙清 道法
 妙香 道清 道澄 妙椿 妙情 道入 淨蓮 妙印
 道春 妙香 道秀 妙看 妙貞 宗鑿 妙範 正頓
 常真 妙蓮 道昌 玄意 良真 宗喜 貞寿 宗鑿
 以上長恵縫之
 道情 妙頓 妙香 道林 常蓮 為二親菩提三郎兵衛
 道法 妙栄 妙印 為二親菩提也 為二親菩提太郎右衛門
 道慶 道効 ヲミヤ逆修 為二親菩提仁左衛門
 為道久 妙讚 菩提飯沼藤八 道夏 道果菩提 庄九□
 常真 為二親菩提惣左 為二親菩提長吉 道□
 為二親菩提五左 為二親菩提惣兵内義 逆修道満
 妙西同母之菩提 為道清妙宣菩提 道情菩提 イヌ女
 為二親六兵 為二親助十 道鑿 妙蓮 妙看 七良右門
 妙鏡 ヲミイ ヲニク 助右衛 道嘉 為二親久左 道□
 為二親六郎右 為父文十 為二親甚五 七左衛門 道□

(第三紙)

奉建立涅槃像

于時寛文九己酉曆不思儀從都縫物

来進男女以他力致成就当山奉納是偏觀世

威徳也然則助力之施主現世者得無比之副寿

果者到涅槃之妙覺而已

飯沼山円福寺当住持法印権大僧都長恵

寺中

阿弥陀院永恵 尊乘院

東性院清恵 鏡智院

頼福院清恵 円管院俊恵

宥恵 清恵 成就院貞恵 証乘院叶恵

檀恵 普門院海恵 光憧院愛恵

本願 紀州又右衛門 同新兵衛

江戸喜右衛門

法印翁恵上人菩提

縫物師 京都次郎左衛門 同清右衛門

同喜兵衛 江戸七郎兵衛

(第四紙)

三九郎 二郎兵衛

伊左衛門 六左衛門

賀兵衛 おむら

新助 大郎右衛門

伝兵衛 七郎兵衛

平兵衛 惣兵衛

権兵衛 伝十郎

三郎兵衛 六兵衛

久左衛門 兵左衛門

六助 又左衛門

五郎兵衛 庄二郎

勘七郎 久兵衛

八右衛門 コサ 清左衛門

藤左衛門 九郎右衛門

吉左衛門 アシロ幸八

惣兵衛 若太夫

三三四郎 カラコ市左衛門

善七郎 ラウモ衛太夫

市郎左衛門 ナニ子庄左衛門

善兵衛 網中 弥五左衛門

伝右衛門 アシロ与左衛門

吉十郎 タナハ与吉郎

忠右衛門 茂兵衛

彦九郎 半四郎

惣兵衛 アラ 七兵衛

茂左衛門 サカイ利右衛門

吉兵衛 ヒロ 甚七郎

カラコ太右衛門 サカイ宇兵衛

佐次右衛門 サカイ久四郎

孫左衛門 ヒロ 五平次

兵二郎 清十郎

利左衛門 幸作

久兵衛 タナハ善右衛門

嘉左衛門 サカイ惣五郎

アシロ金左 サカイ惣二郎

カラコ孫太夫 紀州 清太夫

カラコ助左衛門 ヒロ 八兵衛

ヒイノ才兵衛 タナハ清左衛門

庄三郎 タナハ助左衛門

タナハ次郎兵衛 タナハ甚太夫

タナハ市郎左衛門 ヒロ 九郎左衛門

タナハ半太夫 アシロ平兵衛

大王 善四郎

(1) 唐子浦、現在和歌山県日高郡日高町比井。(2) 現在和歌山県日高郡南部町堺。(3) 現在和歌山県日高郡由良町網代。(4) 現在和歌山県東牟婁郡古座町古座。(5) 不詳。(6) 不詳。(7) 現在和歌山県海草郡下津町大崎。(8) 現在和歌山県田辺市芳養町。(9) 現在和歌山県日高郡日高町比井。(10) 現在和歌山県田辺市。(11) 現在和歌山県日高郡日高町阿尾。(12) 現在和歌山県有田郡広川町広。

(第五紙)

ユヤ 権兵衛	ラクニ	刃田村男女為菩提
アメヤ仁兵衛	ラコヤ	
アラ 兵右衛門	ラツル	
甚九郎	ラミヤ	為二親菩提内蔵助
勘兵衛	ラコマ	
イセ 小平次	ラハル	為宗源菩提
吉兵衛	ラタツ	
八兵衛	市蔵	
タナへ伝十郎		
甚兵衛	飯沼村惣男女為菩提	
網中 加兵衛		
網中 八兵衛	新井村惣男女為菩提	
伝助		
作十郎		
アマコハ、		
ライヌ母		
深芝 ⁽¹⁾ 村男女十六人為菩提		

(第六紙)

道清 妙秋	了空 妙回	為逆修	ヲトウ逆修
道秋 道喜	妙喜 道秋	道善 妙善	道西 道性
妙椿 妙菴	道海 妙方	常宗 道詮	施王永恵
高恵 増恵	道西 妙春	妙高 施王俊恵	五
須賀網中衆 ⁽²⁾	子ツミ	七郎右衛門	
	ナ南ヤ	久右衛門	
	サコヤ	久兵衛	
	アヤチ	嘉半次 ⁽³⁾	
	ヒラマツ	長右衛門 ⁽³⁾	
	シイナ内清	左衛門 ⁽⁴⁾	

(1) 現在茨城県鹿島郡神栖町深芝。(2) 須賀郷。現在旭市東部より海上郡飯岡町一帯。(3) 現在海上郡飯岡町平松。(4) 現在旭市権名内。

妙善	宗菴	有五	道安	清次	ラクフ	榮正	妙春	寿頂	妙忍	妙輝	トラ	道金	クマ	妙月	正旺	西源	真妙	道法
道照	正菴	叶齋	妙鏡	藤兵衛	ワセコ	意言	於女	淨心	道勤	マツ	道安	ヒサ	ミノ	宗榮	行蓮	妙清	妙心	智法
良味	稗円	妙貞	於刀女	於龍	ヲタン	保順	於鍋	上総国	道琢	アキ	チャウ	トラ	ヲト	順清	妙蓮	学管	道齋	妙有
高管	玄正	妙順	妙光	二親為菩提	ヲカメ	妙法	淨榮	新官 ⁽¹⁾	ミヤ	イセ	チャウ	トウ	戸田	柏熊仁	右衛門	長紅		
叶貞	淨蓮	妙白	妙忍	惣沢	ヲチヨロ	妙円	於長	植村彦右衛門	道証	妙真	宗勤	為二親	道監	同内儀				
可讀	玄齋	妙誓	妙春	妙春	藤左衛門	道喜	禪定門	於要	二親為菩提	并当尊	三十三月	參詣	成就所	吉崎村	林孫兵衛 ⁽²⁾			

淨恕	妙仙	妙不	マツ	常善	常心	ツル	妙岸	サル	トラ	カメ	イセ	ヒサ	一郎	左衛門	母	伝兵衛	トウ		
妙正	妙汲	寿清	常阿弥	ヒヤク	タツ	イセ	道西	マツ	ミイ	妙蓮	チャウ	サル	ミヤ	ル	ス	八郎	兵衛	サル	
妙軒	妙慶	サル	勘十郎	妙性	淨正	トラ		タケ	ヒサ	妙法	コサ	ワキ	ル	ス	八郎	兵衛	サル	妙西	
行軒	セン	源秀	道正	涼西	ヲタ	セン		テコ	セン	タツ	ナツ	四郎	左衛門	内儀	タン	カメ	フル	イ	トウ
善太郎		道永	ミイ	トラ	彦右衛門	イノ		ソト	カメ	キイ	マツ	道業	カメ	フル	イ	タニ			
ツル女	妙有	宗医	ツル	ワカコ	ニク	タケ	ナツ	タン	オマ	淨清	トラ	イセ	マツ						

サル	妙周	妙皆	カメ	為父	シマ
セン	マン	道喜	チヨロ	カメ	三左衛門
マン	タン	ミツ	カメ	妙春	弥右衛門
タン	ミノ	ヨメ	カメ	惣左衛門	与兵衛
クラ	トウ	ツル	トウ	刀帯	弥兵衛
ヒツ	キイ	チヨロ	チヨロ	サル	長兵衛
フク				与惣左衛門	

(1) 上総国新官、現在勝浦市新官。(2) 吉崎村、現在八日市場市吉崎。

道源	道行	妙範	妙智	淨榮	西順	ヲマス	天誓道意信士	常耀	淨般	道好	カメ	トウ	チヨ	妙三	五左衛門
妙岸	妙鏡	道喜	寛弁	妙采	西誓	ヲモツト	如誓妙惠信尼	妙薰	妙般	長太	彦右衛門	玄了	トラ	道參	ワカコ
妙正	淨明	妙止	俊養	妙俊	淨林	ヲツル	道月禪門	(經)道具禪定門	久兵衛	妙円	ルス	圖書	ワカコ	妙心	ワセコ
道祐	妙林	妙鑿	永光	道鑿	一誓	五良左衛門	妙金禪尼	(經)妙慶禪定尼	妙照	道正	イヌ	イヌ	道省	宗玄	マツ
道正	妙見	妙善	妙性	道照	妙円	二親之為	六親	門阿弥	淨金	休放	道讚	妙心	チヨロ	道親	マツ
															妙全
															トラ

光詠	セン	サル	イヌ	有西	理左衛門	トウ	道照	宗貞	マン	妙進	子、	妙久	妙宗	妙円	トウ	ニク
フク	マツ	ラタ	コチヨロ	鏡无	休京	マツ	妙円	源貞	チヨ	妙真	ヨ子	妙琢	妙連		タン	妙達
二郎	イヌ	道巡	ハル	相采	妙京	妙素	サル	宗親	リヤウ	妙運	トウ	妙正	妙正		トラ	妙鏡
マツ	妙円	道深	チヤウ	淨源	洲院	妙惠	ツル	妙慶	子	清心	セン	道慶	左太郎		サル	法榮
四郎兵衛	吉左衛門	二郎右衛門	伝吉	西鏡	道光	妙円	タン	源淨	タ	光寿	淨正	道金	カメ		カメ	妙春

了清	子、	カメ	宗源	子コ	ルス	チヤウ	アマ	クス	淨貴	妙善	寿覺
サル	源左衛門	長左衛門	藤左衛門	常心	フク	清範	クマ	妙忍	妙讚	ヨシ	
カ子	子、	イセ	セン	ミイ	ミノ	道勤	センマ	チヤウ	永林	常信	
トラ	上ロウ	イヌ	妙源	宗詮	タン	道詮	花心	道讚	妙印	妙常	
マツ	ヲサ	タケ	妙	源兵衛	忠	道榮	トラ	妙全	ツル		

光月	ミノ	孫兵衛	マン秀	セン	妙山	ヲマ	逆修	タケ	保蓮	イセ	道倚	常照	サル				
チヨロ	仁右衛門	道鏡	妙心	ワカ	妙チン	妙可	道知	庄兵衛	道看	妙如	妙泉	常光	常月	覚保	チヨロ	妙預	内匠
妙勘	チヨロ	メカ	ツル	セン	カメ	オマ	妙清	妙堪	妙証	妙親	常円	道運	敬運	妙乘	道昌	道照	金左衛門
タン	イ子	ミツ	トラ	タン	チヨロ	妙吞	妙心	常寛	常春	フク	常運	妙保	妙德	道全	ワセコ	ミノ	子、
ミイ	ワカ女	イセ	浄心	妙真	逆修	詠花	妙育	ツル	道運	テコ	常玄	ヒサ	リヨウ	妙仙	妙從	与兵衛	マン
イヌ	カメ	外記	イヌ	道參	ハル	ホウ	青蓮	道円	妙觀	妙深	道演	シマ	道順	常光	マス	タツ	

カメ	カメ	子、	長左衛門	ヨメ	ヨナ	甚太	妙久	イヌ	道光	浄円	善秀	浄秀	クニ	トラ
マツ	五左衛門	カメ	カチ	妙春	道意	ナツ	道性	ワカ	妙光	信士	太郎右衛門内儀	道秀	チヤウ	
権兵衛	五兵衛	チヨウ	藤左衛門	トラ	セン	ヒヤク	為二親	マン	道鑿	浄弘	道喜	イヌ	トフ	妙全
マツ	ミヤ	ヲマ	クニ	七郎兵衛	妙全	フク	道西	妙旬	妙鑿	信女	定誓	ヲマ	タツ	争慶
ヒツ	勘右衛門	道參	久右衛門	妙心	道全	妙是	妙詮	庄兵衛	妙順	浄範	為二親	妙感	長右衛門	入惠
伝兵衛	久兵衛	マツ	新左衛門内儀	善久	妙立	為二親	清心	道順	信	仁左衛門	タメ	妙秀	カメ	

彦左衛門	キイ	縫之丞
妙正	宗慶	ヲトコ
子、	ナハ	為二親
道喜	勘左衛門	太左衛門
キイ	キク	妙信
為二親	ツル	妙

(第十一紙)

イヌ	〇	サル	〇	道光	主水	妙宗	カワ	道清	妙讀	妙海	妙栄	常保	春香	妙運	フウ	カ子
タン	内蔵助同内儀	為二親	与兵衛	妙星	タケ	妙連	ウシ	山三郎	マツ	悲芳	妙照	妙乘	寿斉	妙到	マン	マン
常連	ヲマ	コマ	セン	子、道夏	妙連	道閑	道順	カメ	淨念	マツ	連清	妙監	平兵衛	法転	タン	
甚三郎	妙倚	カメ	チャウ	道喜	チャウ	クマ	妙鏡	マツ	道法	妙照	チン	妙滿	尊敬	道鑒	ミノ	ミノ
又左衛門	ヲマ	七郎	サル	妙尊	ミイ	イヌ	妙清	妙筈	道海	チヨロ	妙徳	チャウ	ルス	妙道	トラ	妙阿

カア	大市坊	常寛	カメ
妙秀	正覚	妙源	サル
道深	伝吉	妙春	妙巡
妙到	妙光	淪円	道覚
為二親	妙偈	秀演	ナヘ

(第十二紙)

浄円	寿希	道保止居士	妙止	直誉	浄往	道安	道照	八之助	宗故
妙照	道真	道照次雲常	妙泉	真慶	清心	市兵衛	道隆	於嶋	妙蓮
常春	道栄	妙智勝大居士	円順	妙照	妙順	浄端	道果	女良	宗順
妙春	道西	道清	妙春	常安	浄寛	正鏡	妙心	道看	妙安
妙円	道鑒	妙春	於夏女	妙慶	道金	玄哲	於松	道安	墨主
慶林	妙果	妙玉	道秀	長衛門	ツコ	道栄	為二親	日理	治左衛門

【釈迦涅槃図軸木修復銘】

文化十一甲戌年十二月吉辰

当山第廿八葉法印滿惠代

修補寄附主 田中玄蕃

大経師 善兵衛

同 八兵衛

昭和貳年八月

当山四十二世照法代

東都上野山下

悠久堂 泉橋興

三 本堂再建記録（宝暦一二年～安永六年）

解題

「本堂再建記録」は宝暦一二年（一七六二）～安永四年（一七七五）に行われた円福寺本堂（観音堂）再建の記録で、上下二冊の豎帳から成る。この再建は、二一世住持権大僧都法印寛嶺了恵の発願によって、円福寺の檀家ではない他宗門の古座弥三郎が世話人の中心となり江戸での動化を取り次ぎ、また、舍利村（茨城県鹿島郡波崎町）の道心清しゅんのような民間宗教者が参与するなど、宗派を超えた人々の結集により実現をみた。

上巻は、「本堂建立」と題し、安永三年に竣工した本堂再建の経過や、江戸（東京都）や常陸地域（千葉県・茨城県）から寄進を募った動化とその成果について叙述する。末尾には、松本散人山瓜と号する人物による跋文がある。下巻は、安永四年「入仏開帳」として、再建された本堂に本尊を遷し開眼する入仏供養と、続けて行われた本尊開帳の行事について、さらに、「前立入仏」と題し、本尊の前立の仏像を新造、安置し供養した様子について記し、絵師英重が描いた彩色画がそれぞれに付される。巻末には、了恵の隠居後、安永六年（一七七七）に没するまでを追記する。このように、本史料は、本堂再建の様子を記しつつ、その立て役者である了恵の功績を讃える構成になっている。了恵の没後、あまり年月を隔ない時期の編纂物と考えられるが、編纂者や成立時期は不明である。また、惜しいことに、湿気による破損・退色が目立ち、後世の補修時に周囲が裁断されている。

協力者・寄進者を見ていくと、有力な醤油醸造家田中文番をはじめとする銚子の商人・漁師や、町中・若者連中、五十集商人・縄船の仲間組織、観音講・念仏講・万人講などの社会集団など、銚子の社会の一端がかいま見られ

る。また、百万遍講を結ぶ銚子の町場の女性や、飯沼和田町（銚子市和田町）のいそ屋、本城村（銚子市本城町）の川口屋・大田屋・伊豆屋、松岸村（銚子市松岸町）の淀屋など、河岸の船溜近くになつ遊郭に身を寄せる女性の姿も見受けられる。さらに特筆すべきは、銚子より商品を集荷する江戸の魚屋問屋、銚子問屋、深川銚子場干鰯問屋仲買などの商人、日本橋白木屋をはじめとする銚子由縁衆、銚子から江戸に進出した者たちの仲間である銚子出生若者中、銚子と江戸間の道中間屋などの存在であり、一八世紀後半における銚子の商人と江戸との間の経済的なかわりを読み取ることができる。

本史料には、銚子周辺のさまざまな文化状況も示される。境内の整地の際に誦われた越後高田（新潟県上越市）や常陸潮来（茨城県行方郡潮来町）の俗謡や、江戸の職人を招いての彫物・彩色・金物などの細工など江戸をはじめ他国とのかかわりをうかがわせる一方で、絵師に野尻村（銚子市野尻町）の者が見られるなど、地域の文化人も見える。また、再建の資料を確保した市場のあり方なども、銚子固有の地域的性格を解明する一助となる。

このように、「本堂再建記録」は、銚子の社会・経済・文化の一端を反映した観音堂再建に対する寄進の記録であり、銚子の地域特性を明らかにし得る史料と位置づけることができる。

なお、翻刻するにあたり、下巻の彩色画のキャプションや寄進者の書き上げなどについては、極力原本の体裁を尊重することに努めたが、原本に忠実にすることによりかえって内容が不明確となるものがあり、その場合、前後の記載を参考にして整理し示した。

（飯沼綾子・山澤 学）

(表紙題箋)

自宝曆十二年 廿二世了惠代
至安永六年

三手先本堂再建記録 上
十間四面

観音堂

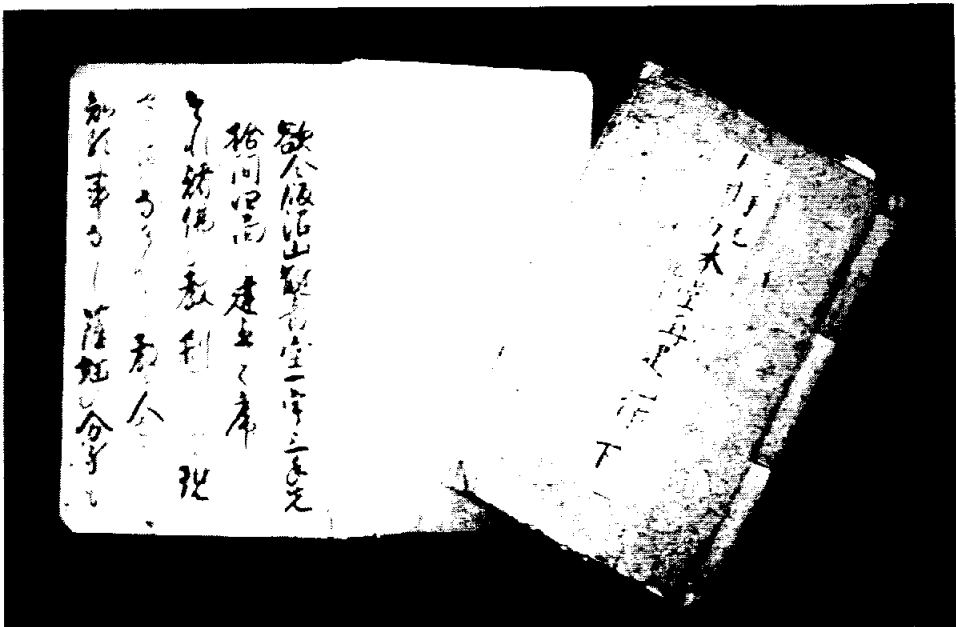
海上郡鎌子

坂東本堂建立
廿七番

飯沼山円福寺

欲令飯沼山観音堂一字三手先拾間四面に建立之序

それ諸仏の教ハ利として現せざるハなけれども、教人なけれハ知る事なし、薩埵の分身も所として至らざるハなけれども、縁なき時ハいたつらに江河に沈ミ給ふ、爰に下総国海上郡三崎庄飯沼山金剛照院の本尊ハ大悲の十一面観世音の靈像なり、則当尊の来由を尋るに、其昔嘗老年中銚子湊の海上に昼ハ一帶の空にたなびき、夜ハほのかに金色の光り有、村民是をあやしみ、漁船に棹さし波の間に間に尋行、網をおろすに光明かくやくたる尊容一軀引上奉る、則本尊の後に一句の銘有、いわく大和国長谷寺観音の餘木を以て稽文会稽手勲二刀三體に彫刻すと云云、各希有の思ひをなし隨喜の泪袖をしほる、しかしより以来靈応口々に新にして遠近の緇素賈賤男女所願一トして満てさるハなし、その靈験具に当山縁起につまびらかなり、初昔草創の砌ハ本堂八間四面に造営し、并二重の宝塔、其外鐘樓、鎮守、



「本堂再建記録」

樓門、三拾餘宇の諸堂棟をそばたて、薨をならへ構広き梵窟坂東廿七番の靈場也、時うつり代かわりて千有餘年の末に及といへども、今以繁昌不異、既天正十六年北条氏政公・海上山城守殿・原若狭守殿大檀那として本堂六間四面に造立し、諸堂不殘修理したまふ、則今の本堂これなり、しかしより今年まで百七拾五年に及、年々修理不怠といへども諸堂三拾餘宇の加蓋なれば、漸々破壊に及ハんとす、殿軒柱根もくつろげハ、秋ハ野わけの吹ことを患ひ、春雨旱月の雨をもうらむ、殊にハ毎年祖師弘法大師御影供の法会、七月法界の施銀鬼、その外諸法会の節、数多の衆僧法席のせばきを恨ミ、参詣の貴賤も是をかなしむこと年久し、因茲予三衣の蓋を授、一鉢の糧を捨て、修造の願ひ夙夜にやむことなし、しかれとも勸六旬に餘り、願望ハ東海に涌出る朝日のごとく、寿ハ西山にきまんとするゆふ日に似たり、爰を以て願望の功を急ぐ事切なり、誠におもんみれば三堂を興する事ハ必壇信による、壇信ハ必勸むる功德により、實に法のみつからひろまるにあらず、人能く法を弘む、しかりといえども自力微少にしてなし難し、依之今年今月より老若貴賤を勧めて一紙半錢の助成を請、一針一草の施行を乞ふ、仰願くハ各予と志を同して珍財を此願の綱に投げ、善苗を此福田に植たまへ、これ併、實積て山をつくり、糸を合せて綱とせんととなり、若しからば施心薩埵の冥慮にかなむ、微善法界に満て、現にハ所願かならず満足し、來報にハ真觀清淨の台に遊ハん事疑ひなし、仍勸化の序如件

宝曆十二年

正月十八

飯沼山

円

福

了

惠敬白

勸化場 絵 図 面
拾間四面
三手先

境内勸化場初年世話人

山本清右衛門隠居
江畑藤左衛門隠居
保立源兵衛隠居
吉田孫右衛門

右連中勸方

当山海辺三棟に風当強故、空銅葺之積、当寺方丈門中格番ニ連立、近辺勸メニ被廻者也

江口勸化旅宿 小田原町

物願主

魚屋問屋 中

宝曆十三未四月分來ル子四月迄中年五年究

江口取次

飯沼浦東・西商人中

勸化之寛

一 金三拾両分三両迄
右五ヶ年之間月割

但金壹両ニ付 壹ヶ年銀拾貳匁
壹月銀壹匁

- 一 金三拾両 施主壹ヶ月金貳分
 - 一 金拾五両 施主壹ヶ月金壹分
 - 一 金七両貳分 施主壹ヶ月金貳分
 - 一 金五両 施主壹ヶ月銀五匁
 - 一 金三両 施主壹ヶ月銀三匁
- 右五ヶ年之間毎月奉納

日護摩

施主

日老銭

施主

仏餉袋

施主

式合半

施主

右之通毎月廿五日夕晦日迄奉納

銚子由縁外店衆中勸化五ヶ年之間志

右旅宿勸化約束通子年迄けち願

旅宿格番世話人

西宮九郎右衛門

鯉屋勘兵衛

佐野屋七兵衛

手品吉兵衛

鯉屋勘右衛門

伊勢屋伝兵衛

湊屋六右衛門

三木屋太右衛門

腰越屋仁兵衛

佃屋市郎右衛門

伊丹屋五郎兵衛

西宮惣八

尾張屋太郎兵衛

虎屋三五郎

佃屋八郎右衛門

海野屋四郎兵衛

亀崎九兵衛

右惣連中魚座四組之内銚子問屋中世話人

付^二申上候

安永三年午四月

円福寺使僧印

光 玄

江戸御連中

建立世話人之内取次

就建立境内普請申・西・戌三ヶ年之間、実本堂北裏東西水場所^江高サ志丈餘

石垣築たる因縁ハ、明和元年申春不思儀成儀常^江不寄荒磯^江大石小石多寄た

る事、当山方丈是ヲ被聞幸の石垣と

村方役人中并世話役方^手相談之上^二志、当地之人足を數多寄せ、飯海根小頭・

同所当金弥右衛門・大野助左衛門先^江立、磯今石を日敷積テ取運、所々寄進

人足多く寄持たる石を積重、ひくき所広場所^江志丈餘の地行いたし、戊年秋

八月迄三ヶ年之間に北側東西取まハし石垣成就いたしたる者也

右建立之内不思儀成御利生故、此帳面^江留置者也

此節磯石世話人 飯海根小頭中

同所 当金弥右衛門

同所 大野助左衛門

建立企分明和三年戊年迄五ヶ年之間本堂木寄、用木の出し山左之通

せんけん山

愛宕山

不動山

前鬼山

右四ヶ所当所の山

常国香取郡 多田村の山

同国利根の辺 西大須賀戸山

常州鹿島郡 石上村の山

此度入仏開帳のかさり物毎度各様御寄進の御世話ヲ請、最早建立あらかた
出来仕来、三月二日夕閏四月五日迄入仏開帳之支度仕、建立之次第、乍憚書

同州江戸崎辺の山

同州布中辺の山

右山々々出たるもの也

大材木引時ハ、当所近辺ハ男女数多集り、其材木車に乗せ、左右ニ永キ綱を附、木やりのおんとのはり合にて境内の普請場迄引附、礎ハ大石を引時も右同断

世話人 町々番頭

明和四年亥二月ハ閏六月迄本堂地行堅メ、村々ハ老若男女数多集り、千本附拾間四面柱通横幅四尺深サ三尺ニ道筋を掘り、しやりニ小石壁土を交合、歌とはやしのはり合ニ、いさみに勇て情を出し、六月迄に柱通不残千本附にて堅めたる者也、千本附に乗る歌はいたこ出鳥のよれまこものふし、尚又越後高田のかけかつ団子のふし

明和五年子五月ハ七月迄本堂石場の堅メ、当村近村若イ者格番ニ思ひくゝに衣類を仕立、三かひの矢倉、どら附にて、一かいは懸声、二かいはうけ声、三かひの上にて鉦・太鼓にて木遣の音ど、日数積て情出し、七月迄石つき不残成就いたすもの也

木遣の音ど取 荒野竹町

根小屋平九郎

同所 万町

中瀬清九郎

同所 同町

あめや甚五郎

飯沼村坂下

庄 助

同所 網中

十 蔵

飯海根十九夜

右人数格番

右町々若イ者思ひくゝの衣類の模様

新生若イ者衣類

坂東順礼之体、麻の地半、御あすり染貫、柿色頭巾、単脚半一同也

馬場・三せこの若イ者衣類

当山法師之体、麻地半衣ニ染玉たすき、浅キ頭巾一同也

東本町の若イ者の衣類

赤丸之内に東の字を染貫、もみのまわし一同也

入野町の若イ者の衣類

右同断

東浜町の若イ者の衣類

麻の地半、日の出の鶴を染貫、おもひくゝの腰巻一同也

田中町の若イ者の衣類

三番そうの立立、もみの廻しにて一同也

和田町の若イ者の衣類

蓬来の亀を染貫、思ひくゝの腰巻一同也

両後飯町の若イ者の衣類

さらしの麻の地半、もみのありをかけ、思ひくゝの腰巻一同也

清水町の若イ者の衣類

麻の花染の地半ニ黒さやのありをかけ、おもひくゝの腰巻一同也

同也

明和六年丑三月ハ本堂小屋組ニ初、当山方丈江戸動化先式ヶ年之中所々ニ銚子由縁の進メ、三ヶ年ハ勸元方与光玄坊ニ預置、当地へ被掃り、月ニ六日の御詠歌の修行ニ企、亦或時ハ近国近辺を勸メニ被廻、数多の人ハ奉加のうけ出情被成たる故、明和六年丑秋八月迄、企ハ八ヶ年にて小家組成成就たる者也 此時仕業人江戸ハ四人呼寄せたる者也

御出立、近村の大念仏^二、本城川岸迄御見送いたし、本城の御船^二被為召、御本尊其夜八船中^二御一宿、翌一日鹿島入保子田村川岸^二、御本尊鴻野平左衛門方^二御一宿、御供之衆中飯沼田中出生川口庄三郎方^二、きやう応^二あひ、中食迄寄進

明三日^二保子田の大念仏^二被送、夫^二其夕方大ノ木村しゆけん者^二の所^二御一宿明四日羅漢寺迄村々^二大念仏、人馬^二被送者也

御本尊御供^二面々

御院代

川福寺隠居

役僧 普門院

円養院

若党壹人

小者壹人

後見

鏡智院老僧

水戸迄御見送之御供 古座弥三郎

水戸御戻懸 御開帳

松平大学様御領分 竹原村

松平播摩守様御領分 府中村

土屋能登守様御領分 真鍋村

留 御開帳 下総国佐原宿

右陸地御通^二、同年十一月中旬 御帰堂

明和八年卯十月迄 屋根瓦・下棟・箱棟・漆喰迄不残成就

瓦師棟梁 江戸浅草今戸

源右衛門

安永元年辰十月迄 御本堂内陳・外陳の下廻・行道様・らんかん・きほうしゆ迄不残成就

安永二年巳十月迄 御本堂内陳・外陳の建物表裏唐戸まで不残成就
安永三年午十月迄 御本堂内陳・外陳のさい色、御拝のきわが三門通してきざ橋の上迄横幅壹丈貳尺鋪石成就

手伝施主 今宮柳町

知光尼

同年同月 御本堂あらかた出来、棟梁式人残、脇大工不残退山

本堂十間四面

西向 ミテサキ・ウチムロ

セイカイ

高 箱棟迄六丈四尺五寸

十間四面一字 外廻塗さい色、入仕後建立

軒口四方四面 龍頭細工

当国小見川 嶋田善右衛門

外陳裏板 天人龍絵師

江戸籠町平川天神前 吉見休宋藤原有成

内陳絵師

当国野尻村 桐山団四郎

内陳金蘭卷

荒野村橋本 專助

金柱箔細工

当村和田 塗師

内陳・外陳彫物細色

門 中 小右衛門

老僧

建立前後積事

方丈代

鏡智院元恵

建立前後

方丈諸事問合連中

名主

出中玄番

組頭

野崎小平治

松本新左衛門

多田甚右衛門

田中仁兵衛

渡辺彦兵衛

建立之内後役組頭

田中源五右衛門

渡辺新右衛門

佐藤源五左衛門

右連中諸事世話引請見合格番

建立中世話人

田中玄番表

森田新兵衛

吉出孫右衛門

田中吉之丞

渡辺七郎右衛門

江畑藤左衛門

保立源兵衛

近藤次右衛門

佐久間孫左衛門

当金弥右衛門

大野助左衛門

此連中方丈御頼之通向々、役相勤たるもの也

当村人足世話人

飯沼

飯海根

町頭格番

建立之一件、右之通御座候、以上

江戸旅宿勤化之儀者、宝曆十三年今明和五子年まで中年五年之間約束之通結願いたし、此度勤化ハ人仕錢物寄附、江戸御連中江度々御勤候得共、此度飾物之儀も御寄附御取持被成、御出情可被下候

取次

小座弥三郎

指渡シ四尺五寸

鰯

口片磨

正味ニ拾五貫目
但シツリクサリ共

獅子ニ牡丹

蘭間五枚

桐ニ鳳凰
岩ニ孔雀

雲ニ天人
右何レモ極彩色

錦戸帳

一丈二尺
二丈四尺

薄絹白帳

一丈二尺

御手の綱 五色の糸式百五拾筋
但シ丈三間

仏前水引 四丈八尺
ウラ九丈六尺

仏前御花 高サ 七尺
但シ三方ヨリ上

同御盛物 右同断

仏前かさりもの

七五三本敷 九膳

右本彩色細工物

鰐口 願主

江戸本小田原町

連 中

世話人

浜名屋平助

芳田屋甚助

鷺野五郎兵衛

津国屋源兵衛

佃屋源治郎

尾張屋太郎兵衛

日高屋重兵衛

富津戸屋長吉

尾張屋市治郎

佃屋長三郎

佃屋文吉

佃屋源吉

鰐口提緒 願主

安針町

藤屋善六

欄間 願主

江戸本船町

小田原町

安針町

銚子

問屋

雙屋勘兵衛

三木屋太右衛門

西宮宗八

十文字屋太兵衛

伊丹屋五郎兵衛

尾張屋太兵衛

佃屋八郎右衛門

海野屋惣三郎

雙屋勘右衛門

亀崎九兵衛

海野屋四郎兵衛

手品屋吉兵衛

虎屋三五郎

湊屋六右衛門

野田屋平三郎

西宮源兵衛

海野屋弥兵衛

佃屋權之助

佃屋長四郎

蘭問 願主

右牡丹獅子施主、外桃灯一張

江戸本小田原町

本船町

安針町

銚子

問屋

- 西宮角右衛門
- 越前屋仁兵衛
- 鯉屋庄五郎
- 村田七郎兵衛
- 右野屋七兵衛
- 伊勢屋平兵衛
- 佃屋佐兵衛
- 遠州屋嘉兵衛
- 大和田久兵衛
- 西宮忠兵衛
- 境屋長治郎
- 相模屋新助
- 佃屋五郎左衛門
- 富岡屋勘四郎
- 西宮仁兵衛
- 境屋太郎兵衛
- 大和田伊右衛門
- 境屋九郎左衛門
- 佃屋清治郎
- 境屋喜右衛門
- 佃屋清右衛門

欄問 願主

右桐鳳凰施主、外桃灯一張

江戸本小田原町

安針町

本船町

銚子

問屋

- 大和田喜右衛門
- 米屋嘉兵衛
- 大和田吉兵衛
- 鯉屋清助
- 西宮源左衛門
- 和泉屋治右衛門
- 海野屋伊兵衛
- 山崎屋長兵衛
- 富津戸屋伝三郎
- 和泉屋重右衛門
- 山崎屋久兵衛
- 佃屋九兵衛
- 尾張屋七兵衛
- 河内屋半三郎
- 新屋新兵衛
- 尾張屋善三郎
- 伊勢屋清兵衛
- 三河屋長兵衛
- 大坂屋弥右衛門
- 神崎屋新右衛門
- 境屋清兵衛

大和田長左衛門

三木屋九兵衛

鷺野清兵衛

米屋安五郎

大和田六右衛門

西宮宗八旅人

房州小浦 万右衛門

同 所長 三郎

右岩孔雀施主、外桃灯一張

錦戸帳 願主

江戸日本橋辺

銚子出生若者中

清水清兵衛倅

佃屋平吉

田中喜兵衛倅

三河屋小三郎

田中半兵衛倅

手品屋長藏

新生七左衛門倅

鯉屋清助

田中平左衛門倅

大和田吉兵衛

田中喜三郎倅

大和田文治郎

いかいね

尾張屋佐太郎

鹿嶋や源四郎倅
伊豆屋四郎兵衛

田中喜兵衛倅

西宮喜助

荒野村

遠州屋半七

飯沼甚兵衛倅

大和屋八兵衛

長塚平右衛門倅

海野屋忠兵衛

新 生

和泉屋伊三郎

同人 妻

同弟 太四郎

飯沼綱代長兵衛倅

王子村宇左衛門

田中久五郎倅

豆腐屋平助

田中伊兵衛倅

神崎屋庄八

新 生

伊勢屋長兵衛

大込甚右衛門倅

海野屋清吉

新生竹右衛門倅

武藏屋佐兵衛

同磯屋平吉倅

伊勢屋甚藏

江戸瀬戸もの丁
太田元右衛門

みろつ太兵衛倅

佃屋四郎右衛門

新生武兵衛倅

鯉屋久治郎

小田原丁

佃屋新兵衛

いかいね

境屋利助

こはん長吉倅

加田屋長七

岡根や彦治郎倅

大和田喜助

松本伝兵衛倅 四ヶ市

村田長四郎

籠嶋屋甚兵衛

伊勢屋宇八

近江屋嘉七

新生境氏

伊勢屋平兵衛

飯沼田中氏

天満屋藤助

同所鹿嶋屋

大和田長治郎

右戸帳 惣世話人

薄絹白張 世話人

江戸小田原丁二丁目

大坂屋市治郎

銚子後飯

水引 願主

江戸中所々

銚子出産若者中

大工長四郎

前瀬吉新左衛門一家 芝三田町

松本喜太郎

本材木丁

石屋 幸七

吉屋弥三郎倅

江島屋古兵衛

權町平川天神前

坂本屋忠七

木挽丁紀国や内

大坂屋治兵衛

新生いせや茂左衛門倅 大橋

青木庄左衛門

飯沼境氏 山下丁

山崎屋由兵衛

鉄砲洲いなり橋いせや庄九郎内

伊勢屋藤吉

京橋竹町

丸山 玄益

同本田紀伊守様御内

三田亀治郎

紺屋丁

三田 玄仙

京橋竹丁

水屋六兵衛

京橋竹丁御屋敷

山口半七

材木丁七丁目

石田屋太右衛門

同所

石屋伊八

京橋柳丁

石屋長八

同所

石屋伊兵衛

材木丁八丁目

石屋三四郎

京橋常盤丁

大工伊右衛門

材木丁八丁目

石屋内まき

木挽丁

有田屋平七

京橋竹丁

太兵衛

蟹丁

万屋弥兵衛

材木丁七丁目

石屋佐太郎

八丁堀二丁目

石屋伝吉

銚子高神村

辻文右衛門

京橋柳丁

石屋吉兵衛

八丁堀松屋丁

石屋治助

神田宮丁

石屋惣七

八丁堀松屋丁

鎌倉屋治兵衛

八丁堀松屋丁

石屋仙之助

同所

多七取次

瀬戸物丁

堀内嘉助

本庄柳原式丁目

石屋長右衛門

麻布谷町

山口吉兵衛

高神

山口源兵衛

本庄御船藏前

高橋八郎右衛門

靈岸島湊丁

宮崎源兵衛

深川北川丁和田半兵衛伴

田中半七

深川夕力橋

山口半兵衛

こはん五郎右衛門作

根本喜兵衛

靴町するかや治兵衛内

駿河屋利助

飯沼野崎氏 幸橋

藤白屋儀助

芝切通し

嶋屋彦兵衛

飯沼長兵衛伴 箱崎

近江屋庄兵衛

霊岸島浜丁

福嶋檢校

数寄や八し

石屋善六

京橋竹町

石屋治郎兵衛

荒野村

大工長七

飯沼新丁

大工平四郎

同西丁

大工忠七

同東丁

大工源治郎

新大工長八

南八丁堀二丁目

伊勢源右衛門取次

本八丁堀二丁目

海老屋人吉内

同店中

中橋南天満丁

菱屋五郎兵衛家内

高神村

山口作左衛門

同所

幸八

同所

孫七

同所

加瀬多兵衛

同所

太三郎

同所

太四郎

水引 惣世話人

京橋柳丁

山口藤治郎

石屋伝七

石屋善六

石屋太七

材木丁

鹿嶋屋治助

七五三本敷 願主

江戸安針町

佃屋八郎右衛門

仏前作り花 願主
同御盛物

本小田原町

若者連

一金拾三兩

取次 今宮村広屋

利右衛門

白木屋彦太郎

荒野村有田屋

七右衛門

江戸南新堀

和泉屋治兵衛

取次 荒野村

油屋五兵衛

女中連中

惣世話人

佃屋八郎右衛門妻

佐野屋源治郎妻

丸屋七兵衛母

佐野屋七兵衛妻

下里内 何某

一金七兩三分

取次 飯海根

大明久左衛門

行徳村

名主 松丸平蔵

組頭 秋元平左衛門

取次 銚子屋長右衛門

御手の綱 願主

江戸小田原町一丁目

糸屋治郎吉

一金壹兩

御手水手拭染貫甘筋 施主

江戸小田原町

鹿嶋屋長治郎

伊勢屋平兵衛

松戸川岸

戸倉屋源内

取次 東商人

江戸小網町

加田屋長右衛門

江戸靈岸島

上総屋幸右衛門

江戸脇店銚子由縁衆中御寄進左之通

江戸鉄砲洲船松丁

一金拾五兩

北川甫久仙

取次 銚子支配

權 六

一金三兩

江戸鉄砲洲船松町

取次 田中甚太郎

江戸日本橋

藤木喜兵衛

江戸日本橋南町目

一金三兩

一	金貳兩三分	行徳川岸	金子紋兵衛	一	金壹分	江戸四日市	又右衛門
一	金貳兩	江戸京橋	浅野有馬	右之金子方丈直請取被成たる者也			
一	金貳兩	江戸鞆町	伊勢屋六兵衛	寄附請取			
一	金壹兩三分	江戸南新堀	内田清九郎	一	金壹兩	瀬戸物町	堀内長兵衛
一	金壹兩壹分	小池善右衛門	相模屋庄助	一	金貳分	小網町三丁目	加田屋長右衛門
一	金壹兩	江戸小網町三丁目	相模屋庄助	一	金壹分	下谷新黒門丁	海老屋善兵衛
一	金壹兩	行徳河岸	広屋吉右衛門	一	金貳分	長浜町	伊勢屋新兵衛
一	金壹兩	江戸鉄砲洲	大坂屋与惣兵衛	一	金壹分	坂本町	会津屋源兵衛
一	金三分	江戸水代	栖原角兵衛	一	金壹分	飯沼村傘屋内	源八
一	金三分	江戸宝町	下里惣右衛門	一	金壹分	芝三田町豊田氏	松本喜太郎
一	金貳分	江戸小船町	万屋治郎兵衛	一	金貳分	本船丁	真宜長兵衛
一	金貳分	江戸小船町	森与右衛門	一	金壹分	小船丁	越後屋清六
一	金壹分	江戸四日市	住吉屋仁兵衛	一	金壹分	木挽丁	紀伊国屋太兵衛
一	金壹分	江戸四日市	住吉屋仁兵衛	一	金壹分	神田鍋丁	豊重勾当
一	金壹分	江戸四日市	住吉屋仁兵衛	一	金壹分	茅場丁	

一	金壹分	伊勢屋半兵衛	金壹分	深川寺丁	ふて
一	金壹分	茅場丁	金貳分	水戸屋治郎右衛門	
一	金壹分	同人取次	金貳分	茅場丁	橋本小四郎
一	金壹分	小石川とんと橋	金貳分	四日市	西宮市兵衛
一	老貫五百文	中橋	金壹分	中橋紙卷丁	相馬勾当
一	金壹分	堀江丁	金壹兩	行徳	銚子屋長右衛門
一	金壹分	堀江丁	金貳分	松戸	利倉屋源内
一	金壹分	四日市	金壹兩	鳥手	銚子屋彦兵衛
一	金壹分	神田鍋丁	金壹分	布川	伊勢屋仁左衛門
一	金壹兩	小船丁	一三百文	布川	加賀屋善兵衛
一	金壹分	小網丁	一三百文	箱崎	春日屋宇兵衛
一	金壹分	南新堀	一貳百文		
一	金壹分	小出原丁	金柱	右老 _二 天人、欄間 _二 三枚施主	
一	金壹分	浅草今戸	道中間屋中		
一	金壹分	加田屋長右衛門娘	瓦師源右衛門	布佐村	馬持百姓中
				世話人	石井源左衛門

— 金四兩
同 石井源之進
惣深村
馬持百姓中

— 金壹兩
世話人 香取平左衛門
布鎌村

— 金貳兩
馬持百姓中
世話人 飯嶋治兵衛

— 金貳兩
関宿問屋・中買中
世話人 染谷徳左衛門

— 金貳兩
内堀甚五兵衛
今井五兵衛

— 金貳兩
境川岸問屋・中買中
川島新兵衛

— 金貳兩
世話人取次 青木兵庫
青木兵藏

— 金壹分
弱屋長右衛門
湯浅屋儀三郎

— 金壹分
境町関根八兵衛由緒
菊本岩路

— 金七兩
右先年円通殿額願主
施主

— 金七兩
銚子
商人中

— 金七兩
今宮
宮内藤四郎

— 金七兩
唐子
与四郎

同所
半右衛門

松本
土佐佐兵衛

同所
山口八治郎

本城
佐野屋源助

長塚
長嶋金左衛門

本城
出中屋源七

大込
和泉屋清兵衛

飯沼
西宮長八

飯貝根
君砂源治郎

同所
見路津弥七
下谷平四郎
尾張屋七郎右衛門

右之帳面之通、金銭不残儲、請取申候、以上
安永四年未二月吉日

江戸連中 道中取次 利根川問屋
田福寺了惠

古座弥三郎
野崎小平治
右江戸勤化之内定宿寄附 本船町

旅宿勘定立会

本船町

海野屋四郎兵衛
亀崎九兵衛

金四兩
金三兩

石毛平右衛門
高田村中

江戸浅草今戸分瓦寄進積

鏡子浦 高瀬

五太力

房丁

江戸小網町加田屋長右衛門隠居

世話人 浄達坊

右世話人取次^二方丈受納被成たる寄進金左之通

金三拾兩

金二拾兩

金百兩

金拾兩

金拾五兩

米八俵

金拾老兩

金八兩

金拾兩

金拾貳兩

御末寺方四ヶ寺
御門中方拾坊
当村惣百姓中
新生村方中
高神村方中
同村高福寺檀中
小川戸村中
荒野村方中
今宮村方中
本城村方中
長塚村方中

金拾三兩

金三兩

金三兩

金三兩

同村

金三兩式分

此寄進^二付物語有
此清しゆん^与申居遺道心、勸進修行のけうかひにて過分成寄進故、
取次得^与尋るに、此道心中様、五ヶ年以前未年此所^二參、御本堂御
建立の由を聞し故、未来の為に宿もなく、常の夜ハ所々の木かけに
夜を明し、雨風之夜ハ御本堂外陳の角^二其夜を明し、境内分町方
迄勸進修行に情を出し、亥の今年迄五ヶ年の中心掛たるたくわへ錢
当村なさげを請し人を頼、度々^二預置、世の中餘命程案し、此度不
残請取奉納^与申、此段取次聞届、寄徳^二の事哉^与方丈^二申上、日記^二得^与
記し、境内へ下札いたしたる者也

観世音万人講
金六拾五兩寄進
金四兩・米八俵

金三兩

金七拾三兩 奉納
先会老口

同村

石毛平右衛門
宮内清右衛門
連中百五人
世話人檀中

取次 石毛四郎右衛門
三門村中
世話人檀中

施主 居しやり
清しゆん

今宮村

荒野村

同村

今宮村

荒野村

同村

今宮村

荒野村

同村

一金三百両

建立前後都合

本城下町

川口屋市兵衛

北側欄干擬法珠

施主

西方

今宮柳町

連

中

御本堂所々承の施主左之通

当村田中

円通殿額再興

施主

若イ者中

東方欄干擬法珠

施主

北方

当村和田

若者

中

世話人 平四郎

源左衛門 利助

東方欄干擬法珠

施主

南方

江戸神出鍋町

豊重

勾当

御拝の柱

施主

南

田中玄番

南方欄干擬法珠

施主

西方

当村

嶋田喜惣右衛門

北

田中吉之丞

東角

渡辺七郎右衛門

当村前瀬古

御拝の虹梁

施主

世話人 松本新左衛門

南中欄干擬法珠

施主

東方

保立源兵衛

渡辺新右衛門

御本堂表・裏唐戸

施主

西方

保立源兵衛隠居

御拝籠

施主

当浦

東・西商人中

御本堂内陳・外陳建物

施主

飯海根浦々

五十集商人中

繩船中

御拝獅子・象

施主

当浦

東・西繩船中

御本堂外陳空雲龍

施主

飯海根浦々

五十集商人中

軒口南方龍頭

施主

同村

初瀬権兵衛

御本堂外陳空雲龍

施主

飯海根浦々

伊勢屋重三郎

同村

寺井七郎右衛門

御本堂外陳空南方天人

施主

飯海根浦々

根本源左衛門

表欄干擬法珠

施主

南

同村

安藤佐右衛門

御本堂外陳空南方天人

施主

飯海根浦々

境屋吉重郎

同村

矢出部村

御本堂外陳空南方天人

施主

飯海根浦々

粘屋治郎吉

北

安藤五郎左衛門

御本堂外陳空北方天人 施主

常陸屋連中
新生村
大川六左衛門
直川屋弥四郎

御本堂外陳表雨犬・猿 施主

荒野村
近江屋源兵衛

御本堂内陳金欄卷柱 施主 南方

今宮村
山田太兵衛

本城
川口屋市兵衛

御前机一脚 願主

当山了 惠

右江戸細工

手伝施主 川口屋市兵衛
世話役 山口藤治郎

当村
野崎小平治

毎年七月十六日施かきの時大位牌一付 施主

当山方丈月六日宛御詠歌執行、明和三年戊の春より安永三年午ノ十月結願、所々江まハし置候寄進の箱同年切

御詠歌連中

南瀬古	前瀬古
馬場丁	西瀬古
浜宿丁	古女中
東瀬丁	東浜町
入瀬古	東中町
西後飯	東後飯
	女中

三番組 和田丁 飯海根中 女中

四番組 新生村 女中

五番組 荒野村 女中

六番組 今宮村 女中

右連立二九ヶ年之間毎月格番

御建立企宝曆十二年午ノ正月二日分安永三年午ノ十二月まで十三ヶ年之間、御建立不残成就吉日撰 御前立人仏勤、此年ハ御本堂二致越年たる者也

御建立中前後之御寄進

御地頭様 御寄進

諸方

殿様方 御寄進

右於御本堂 御銘々様御武運長久御安全之御祈禱抽丹誠被相勤、次所々村々數多之衆中品々之寄進金錢共境内江下札いたし、大帳江記、是又家内安全災才イシ延命祈禱并為菩提抽丹誠法事被相勤者也

右建立之始終十二年之中、相調帳面式冊いたし置候之間、末の人御覽可被下候、以上

安永三年午極月

取次

古座弥三郎

叶

十室の邑に聖賢あり、千里の馬有れとも、是をしる伯楽無けれハ空敷驚馬につらなれり、古座氏ノ老翁ハ莊年より仏神に帰依し、朋友にましかハ、案ニ情厚く、信を以てす、されハ人の果を得る事青柳の風に靡くにことならず、

時成かな爰に

飯沼山金剛照院門福寺

御本堂星霜年ふり、数年再建の願有といへとも、

万金の積ことかたし、爰に廿七世の院主権大僧都寛嶺了惠法印是をなけき大願を發し、主と成て初前宝曆十二壬午年棟梁を撰ミ、十間四面の宝堂を寄せしむ、抑銚江の湊は開山之ほとりとハイへとも、坂東廿七番の霊場にして、

後に八關伽羅川の流れ絶す、前に八町並堂をならべ、一一帶の道筋凡百丁を統たり、北に八利根川の末大海を吐く、南ハ前鬼山・向山・愛宕山・淺間山・

不動峯を並ぶ、殊更川筋江府に通し、往來の船筏をなせり、内外の漁船ハ數百を浮つて己々か輕營をなす、入津者大船ハ柱をならへて商家に手を打音かまびすし、農夫田のおして豊年をはからふ、折繁榮むかしにかハらすといへとも、

動る人なけれハ誰か信施を捧ケむ、仍前誓願に願所皆現せずといふ事なしと菩薩の分身になそらへ、古座氏ノ翁をゑらミ浜家に動化を乞ハ、多少を論せず施主を求むにハ有れと、万金猶満足なし難し、是によつて大願主を江都に供奉し、旅家を転して本尊を供養し、衆生を集めて柱・虹梁を乞ふ、

善男善女ハ速買して街に御詠歌を唱ふ、声を美にして江戸一番の名を聞、誠に一心称名なるへし、或は講儀説法を執行し、施餓鬼万人講を施して、四時に陳を得ず、遅々たる春の日の短くおほへ、秋の夜の水きも足らず、九夏の天も暑を忘れ、玄冬の朝も寒さをしらす、法主の右となり左となり、爰に旅宿を結ぶ事五の年なり、宝曆午より安永四歳まで年一句の間に本堂好処に歌れたり、依て此年華の月入仏供養執行ふの時、再又江府へ登り有縁の善男善女をむかへ、開帳に結縁ならしめむため、是を告るに追々莊嚴の捧もの品々有事此帳面に委し、誠にまめやかに口足の労をいとハす、終に大切を立られたり、此意趣をむなしく年月の土に埋んもいと本意なき事におもひ此帳余紙有に任せてたハむれに似たるつたなき言の葉をのこすのミ、

松本散人山瓜



(表紙題箋)

自宝曆十二年	至安永六年	了惠代
三手先	堂	再建記録
十間四面	堂	再建記録
觀音堂		下

安永四年未正月下旬、当村者不及申銚子領村々門煎家前開帳之支度、觀世音境内各町方迄所々附開帳、諸商人・見せもの・小芝居入込、入仏開帳をまつもの也

安永四乙未年

入 仏 開 帳

三月二日ヨリ四月五日迄

当日明六ツより暮六ツ迄晴天二致多參詣、無何事聽聞被成候者也

御遷前後世話人

惣村若者中

行列外之附近在法師・尼・隱居・閑居、跡より御供

新丁 南丁 裏門 清水丁

開帳中町廻り役 1

村々念仏追々 [2] [3] [4]

飯沼・新生念仏 [5] [6] [7]

当山且中世話人 [8] [9] [10]

高神村役人

名主 加瀬太兵衛

新生村役人

名主 宮内民部

小河口村役人

名主 林喜惣兵衛

荒野村役人

名主 信太清左衛門

(丁裏脱)

当村・新生村念仏

当山方丈 御当番の老中 [11右]

当山代々用人

当山代々役人

当山代々役人

当山代々用人

執綱

長 塚

持 宝 院

辺 田

正 等 院 [13左]

後見

当山弟子

芦崎村

吉祥院 [14右]

長 塚

完 龍

小 松

林 光 [14左]

右 東後飯丁

左 警固 和田丁

古座弥三郎

(蓋) 飯沼山金剛照院出福寺 [15]

平 木

弥 勒 院

小 川 戸

真 乘 院 [16右]

本 城 村

千 手 院 [16左]

後見

執綱

本 城

(蓋)

川口屋市兵衛

右 入 東後飯丁

左 警固 田中丁

本 尊 [17]

此式人毎月十七日夜百万遍願主

前綱左右数多の男女御供 [18]

此女祖母代 19右

此若女母代 19左

百万遍講中 20

御詠歌老女 21

御詠歌六組之女中はたを、前の繩の脇立

馬場古丁

一番組 前瀬古丁

西瀬古丁

浜宿丁

東本町

入瀬占町

二番組 東浜町

田中町

西後飯

東後飯

和田町

三番組 清水町

橋本町

四番組 飯海根

五番組 新生村

六番組 荒野村

飯沼・新生観音講中 22左

ゼンノ綱先立 23右

飯貝根

香炉

当金弥右衛門 23左

執綱

来福院

尊乘院 24右

東光寺弟子 24左

芦崎村

円養院 25右

成就院 25左

東性院 25左

草座

香炉

右 東丁
警固 番頭

左 東浜丁

蓋 田中玄蕃

船木山金剛淨院東光寺 26

今宮村

歎喜院 27右

辺田村

金藏院 27左

当村

森田氏兵吉 28右

荒野村

木屋内長松 28左

二幡童

高神村 高上山 高福寺

小川戸村 妙見山 福寺

荒野村 医王山 威徳寺

今宮村 妙見山 東岸寺

松本村 松本山 光嚴寺

職衆 [29] [30]

長塚村 長江山 勝寺
岡野台村 海上山 棋寺
舍利村 益田山 善寺
谷田部 神崎山 福寺
今泉村 稲荷山 音寺
成田村 成田山 真福寺

常陸鹿島郡石上村客僧花光院

職衆 [31] [32]

本郷宝蔵院
辺田親行院
高田地蔵院
長塚正等院
三崎正覚院
塚本正等院
同欽喜院
野尻龍蔵院
同最徳院

維持

小川戸 觀養院

長塚 地福院

讚衆

三崎 西光院 [33]左

松本 吉祥院

吉祥院

行事

荒野村 不動院
同村 龍性院 [34]
三崎 本願院隱居
四日市場 和光院隱居 [35]

行事

飯沼 人勝院
新生 京極院 [36]

英重画(印)

御本堂迄別当方分道々新こもを敷、数多の大師そうかひを召、左右のしゆげんしらせのほら貝にて三足宛はこひ候行烈

建立ニ由縁人

初瀬氏 [37]

行烈誓固

村方役人中 [38] [39]

別当分直道裏門より境内へ入山門へ廻ル也
御煉先誓固

馬場丁番頭

前瀬古丁番頭

南瀬古番頭

西瀬古番頭 [40] [41]

(西側から見た仁王門・鐘楼) [42]

(仁王門から本堂に至る境内)

此道警固
此道警固

笠神・瀬古頭
飯貝根番頭

境内参詣多ク明六ツヨリ詰ル [43] [44右]

(本堂前)

近村律僧 聴聞場
寺々隠居

御拝役

南 新生 秋本藤
同 淡路や忠
北 当村 浜宿藤
同 秋本清

当御役所 聴聞場
御役人衆中

[44左]

安永四年二月二日五ツ上刻御本尊別当方より御出立、大衆道々御達二而同日
八ツ上刻本堂へ入仏

御請待之役僧

十坊

入仏開帳之内暮六ツ時分合御本堂表メ
(本堂) [45]

本堂夜番

御本尊前
内陳北北南
外陳

十坊二人
法師四人
百姓六人

開帳中毎夜數多男女御詠歌を唱へ通夜を勤る

開帳毎日 明六ツ

閉帳毎日 暮七ツ

当山方丈并門中一口二座御法楽を揚ケ、朝夕開帳・閉帳勤るもの也

一 仏前講釈

普門院

阿弥陀院

鏡智院

右前口格番

昔人王四十四代元正天皇御宇養老年中海中出现

大和国長谷寺

本尊十一面觀世音
本尊一木同体

毎月十八日御縁日、靈験新にまします御信心二而拜見

(飯沼觀世音来迎、版刷) [46]

御詠歌

このほとハ 万のことをい、ぬまにき、も習らわぬ 波の音哉

毘沙門殿

御脇建御像

春日太明神

此御宮由縁有之、扉開事不相叶

当村 何某 蠟燭抹香寄進 [47左]

仏前 七五三本敷 願主 江戸 戸 48

高田村

仏前御備 閉帳中十日ツ、御盛替 宮内清右衛門 49

当村馬場丁

仏前御備

柳与惣右衛門

ホ立源兵衛

佐藤源五左衛門

同 南丁

森田新兵衛

松本新左衛門

同 東丁

吉田孫右衛門

同 後飯両町

渡辺彦兵衛

同

田中丁・東浜丁

同 辺田村

市兵衛

酢屋 権兵衛

同 あし崎村

石毛平右衛門

松本新左衛門

同 入仏初日宝納

此備三日宛^{三所}所々々備かへる

願主 江戸 戸 50

願主 江戸 戸 51

(花一对)

(盆栽) 願主 本小田原丁連中 52

(盆栽) 願主 江戸本船町連中 53

本城

鎮中作り花一对

願主 川口屋市兵衛 54

飯貝根浦

仏前金灯笼(一对)

願主 地下船中間

世話人 西広十治郎

海老長兵衛

吉川清右衛門 55

是より外陳のかさり物

江戸本船町

古堂ヨリ外陳大香炉

施主 西宮九郎右衛門

名洗村

千草縮緬幡一掛

施主 伊藤仁右衛門

娘為菩提

荒野村

緋縮緬幡一掛

施主 行方屋庄三郎

娘為菩提

荒野村

藤色縮緬幡一掛

施主 大上伊兵衛

名洗村

もあきもんけん幡一掛

施主 伊藤仁左衛門

妻為菩提

御本堂幡数多有之候得共、入仏之初日寄進故出スもの也

当村

鶴亀之模様大でうちん一ツ 施主 馬野金六

今宮村

(大蓋一对) 施主 塚口屋太兵衛娘 [56]

江戸小田原丁

(天蓋一对) 施主 西宮惣八娘 [57]

本城下町

(提灯) 施主 川口屋市兵衛 [58右]

松岸村よとや内

(開帳銘提灯) 施主 子 供 中 [58左]

ワた丁いそや内

(開帳銘提灯) 施主 わかむら [59右]

本城あふたや内

(開帳銘提灯) 施主 あつまじ [59左]

本城大田や内

(坂東廿七番銘提灯一对) 施主 瀬川 [60]

本城大田屋内

施主 さやま [60]

府中新地

(十二面観世音銘提灯一对) 施主 ふじや内子供中 [61]

本城いづや

(開帳銘提灯一对) 施主 子 供 中 [62]

ワだいそや内

(開帳銘提灯) 施主 ふじ川 [63右]

江戸小船町越後屋

絵見上山 俵藤太の置絵細工 施主 清六妻之細工 ぬま [63左]

御本堂ニ大小之絵馬数多有之内、此絵馬入仏初日遠方奉納故出ス
もの也

所々村役人格番、右毎日内陳^{江註}

外陳 護摩木 役

御影 役

御札 役

新生村方役人毎日式人

高神村役人毎日式人

荒野村役人毎日式人

新生町方毎日式人

荒野町橋本分富田屋町迄毎日式人

其外村々格番

当村取持上下^{二七} 毎日拾人宛

其外所々役人毎日拾五人宛

開帳之内遠方御参詣数多之中、不寄思雨天にて御難儀之前無遠慮別当方^{江註}
御・宿被成候様方丈今被仰出

取次 口上

則本堂南の方へ坂東三十三番の観世音の安置し給へて、参詣の男女に札を勸
メ禪衣を着せ、所の女人集り格番に御詠歌を唱へ先キ^二立、一番の杉本分三
十三番の名古寺迄所々札を打本堂^{江註}廻り開帳を拝し禪衣をおさめしもの也

御詠歌中札打

世話人 田中惣兵衛

清水儀右衛門

町々女中連

是分宝物数多有といへともあらまししるし置もの也

あかざの柱の因縁

先年古堂再興し時、当村に妻子を不持老女朝な夕なのいとなみに、春ハ若葉をつみ、夏は品々の草をつみ、しろかひ露命をつなくきやうがひにて、内陳の杭宅本施主附、其時の人々大奇進かなと唱へたる、於当山あかざの柱と申也

第壹

瑪瑙寶石

講釈

格番

馬場丁 宮 本 清 蔵

同 丁 島 田 大 助

親世音海中出現の時、左り御脇に挟ミ上らせ給ふ、即飯沼・新生両村の鎮守龍蔵権現と崇め奉る

第貳

一寸八分米

講釈

証 誠 院

本尊海中出現の時、七日七夜ふりし也、今におひて二粒の米を残し、末世の諸人に其奇得を拝せしむ、是今隠沢村の名を改、飯沼村と号ス

第参

雲加持五鉢

講釈

成 就 院

弘法大師雨乞の御時用ひ給ひしんすの五鉢なり

第四

石蟹

講釈

尊 乘 院

格番

讚州多度郡屏風か浦より上る、高祖弘法大師末世の衆生に真言即身成仏の証拠を残さんため、蟹を加持し給へハ、蟹肉身を転せず、有儘石と成て成仏いたしたる体なり

第五

雲煙鈴

講釈

東 性 院

親世音海中出現の時、龍宮より龍灯と共に上る、此鈴の音を一度聞にふるれハ悪事災難をまぬかる

講釈

金作り太刀

来 福 院

伯耆守安綱作、昔上源の頼光大江山酒吞童子退治の御太刀と同伴にして悪魔降伏の太刀也

講釈

ねはん講五百羅かん

講釈

保立隠居

奥院満善寺

安 養 坊

取持

笠上瀬占中

講釈

当寺親世音縁起

証誠院法印誘恵

此所あかざの柱の因縁有

境内十王堂ニ親鸞上人御直筆の阿弥陀如来安置し給へて毎年春の日岸中日ニ結縁のため開帳せしむるもの也

新夕ニ建立

願主

大般若六百卷

了 惠
手伝施主
飯 海 根
植松町連中
其外数多寄進

同年四月六日

前 立 入 仏

当山二十一世法印了惠建立

往んし宝曆末の年、権大僧都法印了惠大願を發して新らたに本堂十間四面に
再建を企、本尊に誓つていづく、我大願空しからずんハ御長ケ八尺之尊像を
造立し前立に安置せんと發願、仏意に叶ひしにや、十有三年の間に本堂建立
成就致し、安永四末三月二日洛慶供養にきく敷、翌三日より為結縁開帳し、
卯月五日にハ事ゆへなく閉帳致し、翌六日右造立の前立の入仏殊に天氣快晴
にて諸人群集致せしは三月二日本尊の入仏に異ならず、遷供養ハ当山法印了
惠導師となり、末寺・門徒十坊不殘、末寺方ハ法服七條、門徒十坊は金紋紗
の如法衣を着し、膳の綱の善男女ハ銘々笄摺を着し、円福寺より本堂迄六字
詰メの念仏にて御送れハ、念仏新生村合野尻迄、当村合辺田・三崎迄、常陸
ハ波崎より中舍利迄不殘参詣して、終日鐘・太鼓の音のかまひすし、さハ聞
もならハぬ浪の音の御詠歌等して法云ハ二箇の法事ハツ時法事終ぬれば何レ
婦寺致し畢ヌ

江戸世話役惣代下り前立入仏天かいの持

龜屋 九兵衛
虎屋 三五郎
佃屋八郎右衛門

白神大明神
開帳
延命地藏尊

新生村
別当 阿弥 陀院
同 村
取持 五十集組

鐘樓堂を後に当テ東向也、莊嚴敷の美を尽しぬ、前に九尺計の舞台を出し、
神楽神子舞を興行し、鳴もの大小の太鼓・笛・鈴の音ハ昼夜絶へず、神子
は十二三歳計なる女子二人美容なるに頭に金の花法冠を戴き金紋袈の直垂を
春風に靡し舞の袖をかへせハ、参詣の群集ハ天の乙女の姿かと足を留ぬもな
かりけり

春風に 吹る、神子の 姿かな 白 井

天の巖戸を思ひ出して

花ともに ひらく扉や 舞の袖 星 波

開帳之内浦方漁船面々印立、川口出入安全之祈願いたすもの也

出開帳

一 秩父七番仕伏 法 長 寺

一 地藏菩薩 辺 田 村 影 向 寺

一 真向弥陀如来兩尊 筒 井 極 楽 寺

一 筒井淨妙像一体 八ツ房の 桜か香配る 口説哉 白 井

一 今宮庚申 正 覚 院

一 当村薬師宮殿 來 福 院
泊代建立

一 秩父十九番

一 寝釈迦如来

一 秩父三十式番

一 大般若勅化

一 子安明神勅化

一 不動五太尊

一 業師如来
一 聖徳太子

出開帳右之通り

接待茶開帳中

是る境内外のかざり物

右之三人、則前立入仏之天蓋之役

龍石寺

神善寺

法性寺

川福寺

神主

大膳

岩城小名浜

修善院

引撰寺

当村・近村女中連

毎日格番

江戸世話人為惣代

開帳取持 亀崎九兵衛

佃屋八郎右衛門

虎屋三五郎

辺田村

施主 弥左衛門

前の綱木綿式反共

本城下町

施主 太田屋文右衛門

前の綱三反

江戸日本橋本材木町式丁目

(坂東廿七番十二面観世音開帳銘幟一対) 村田藤助 [65]

本堂南大松 当山古跡 [66]

養老年中本尊海中出現の時龍宮今夜毎に灯籠を捧たる、其尊きを今
入仏開帳のかざりものに奉納せしなり

飯沼東浦・西浦・中浦惣商人

新生

(天水桶一対) 五十集・縄船中 [67]

(天水桶一対) 飯貝根浦 [68]

境内町々昼夜百人ツ、番

江戸

(坂東廿七番観世音開帳銘屋根付提灯一対) 魚座問屋中 [69]

本城村

(観世音菩薩銘屋根付提灯一対) 川口屋市兵衛 [70]

(観世音菩薩提灯一対) 仙台大嶋村

(十一面観世音銘屋根付提灯一対) 小野寺和吉 [71]

飯沼村後飯両丁

(坂東廿七番十一面観世音開帳銘幟) 若者中 [72右]

飯沼浦

(坂東廿七番十二面観世音開帳銘幟) 東西宰科中 [72左]

新生浜町

(十一面観世音開帳銘幟一対) 廿六夜講中 [73]

(南無観世音菩薩銘屋根付提灯一対) 荒野村橋本連中

世話人 湯浅屋佐兵衛

外川屋善八 [74]

(南無觀世音銘屋根付提灯二対)

荒野村富田屋町連中

穀 町

世話人 油屋喜兵衛

綿屋 弥助

西広屋 太七

同町若者連中

世話人 西宮作兵衛 [73]

今宮 柳丁

右左屋根附大焼灯

何 某

今宮 村

左右屋根附大烧灯 式ツ 施主

柳町 連中

開帳之内境内分新生町迄毎日昼夜火之元番廻五拾人宛飯海根分出

差図人 多田甚右衛門

世話人 飯海根町々番頭

境内分町方迄飾物品々候得共あら方印者也

開帳之内所々取持方^江為御見舞^{ホカヒ}・せい籠^{セイカ}・重之内被下候、御連名帳面^江

委留置方丈^江相届申候

取次

古座 弥三郎

新生町 初瀬権兵衛

森田 新兵衛

出中 太兵衛

吉出 孫右衛門

江畑 藤左衛門

渡辺 七郎右衛門

近藤 治右衛門

大野 助左衛門

飯海根

右連中開帳中上下着、無不參相勤たる者也

開帳中毎日役割指図

田中源五右衛門

渡辺新右衛門

佐藤源五左衛門

鏡智院 老僧

田中 玄蕃

野崎 小平治

松本新左衛門

田中吉之丞

右連中勸化場諸世話人

開帳中前後当御役所御吟味方之御役人衆毎日境内分町方迄被成御政道たる

故、惣^モ喧嘩口論怪我過を除何無障、参詣之男女御本尊宝物まで寛々拝見い

たしたる者也、此度之入仏開帳近国近辺参詣之老若男女貴賤群衆^二境内分

町方迄之諸商人日延之願申達候得共、方丈方^二所々^江しらせ之書付之通、日

延なしに四月五日閉帳結願致候畢

御建立惣世話人中

安永四年未四月五日

叶

右入仏御練儀式通せまき故、当方丈様分御高札之きわ分裏門迄道は、三尺村

方役人立会^{三前}ひろけたるもの也

立会役人

田中玄蕃
野崎小平治

田中源五右衛門

渡辺新右衛門

佐藤源五左衛門

同春秋境内千本桜所々分寄附

願主 田中玄蕃

同年十二月 権現石鳥居再興

願主 別当 円福寺了恵

御施主 松平図書頭源忠頼 取次 森田新兵衛

加藤吉兵衛

寛文壬寅九月十三日御建立

安永四乙未年迄百拾五年^一成

右鳥居 御施主 従五位下松平外記源忠宜御建立

当方丈了恵様念願成就被成たる故、安永五年申秋八月之頃分御保養被成度被
思召、依之御隠居之御心懸

安永六年酉正月、双方御参云之上当山後住相定

同年二月十六日、当寺了恵様御隠居積年七拾八歳^{二前}当山奥庵^江為入たる者也

安永六年酉二月十七日、当山廿二世之方丈高神山高福寺法印庵恵様被成御入

院たるもの也

同年同月、鏡智院老僧元恵当山御本寺^江御願申上、境内之奥^江被致隠居たる

者也

建立世話人之内古座弥三郎、願主了恵様分余宗なれとも商売之縁^{二前}御願被

成候^二付、善根之種幸^二存、建立勸化抽丹誠相廻、数多之人々他力に依る御

本堂成就いたし、入仏開帳結願迄何の無相障相勤、夫分是迄世の中品々^二交

りしか、最早老年^{二前}世事のこと不相叶、隠居之心懸^{三前}法名を請るもの也

天明元年迄積年七十七歳

当山廿二世法印庵恵、法名之脇書送之者也

(位牌、逆修供養銘)

「 飯沼山本堂建立

徳 功 行 円 居 士 霊 位

世話人之内老人

南無大慈大悲観世音

ありかたや 来世道引 建立を すすめし利益 法のみやけに



2



1



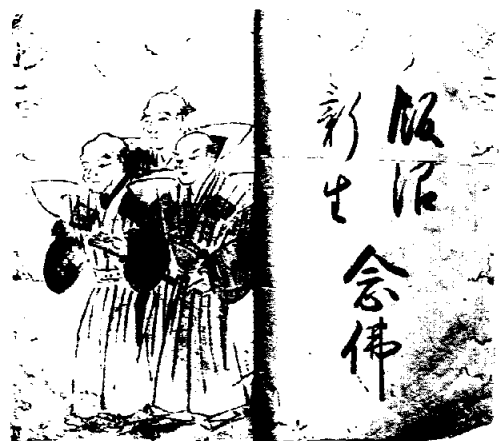
4



3



6



5

新服
念佛



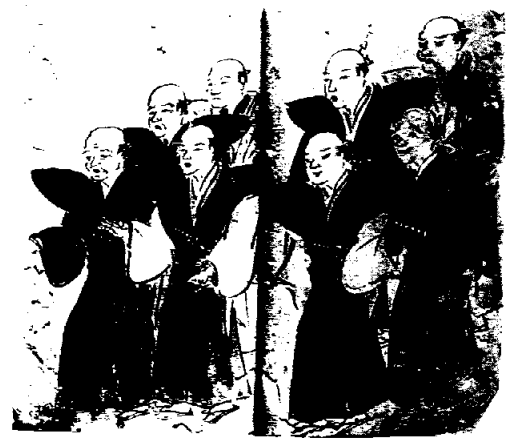
8



7



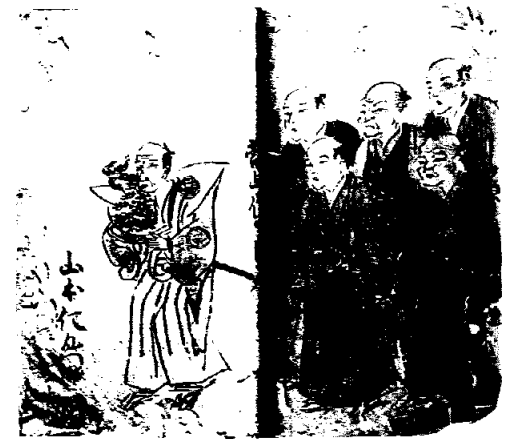
10



9



12



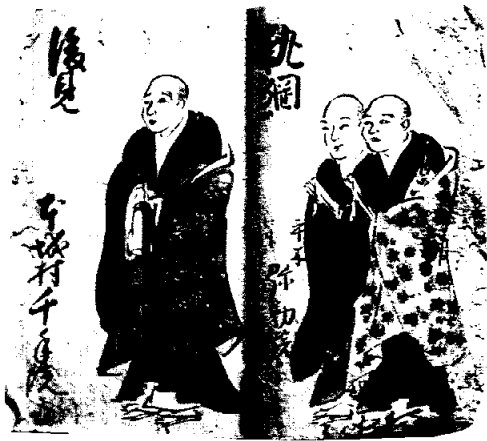
11



14



13



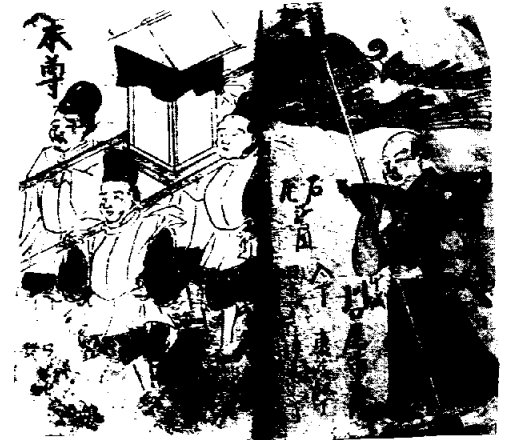
16



15



18



17



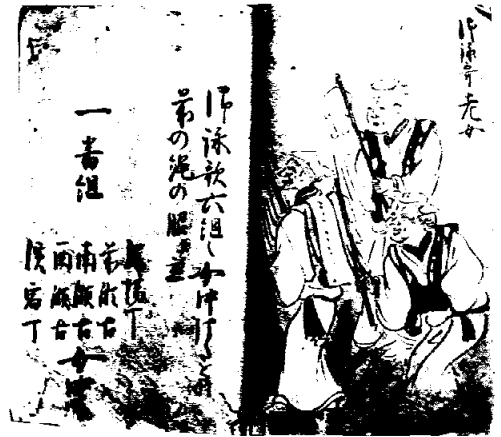
20



19



22



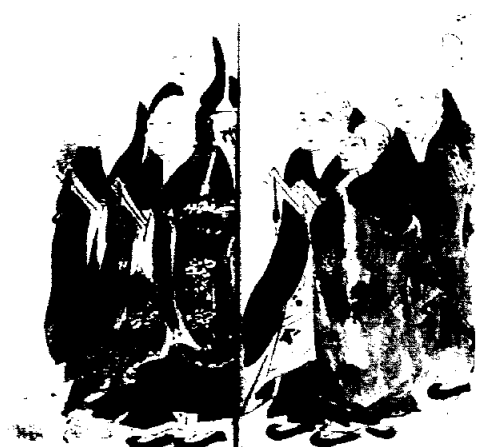
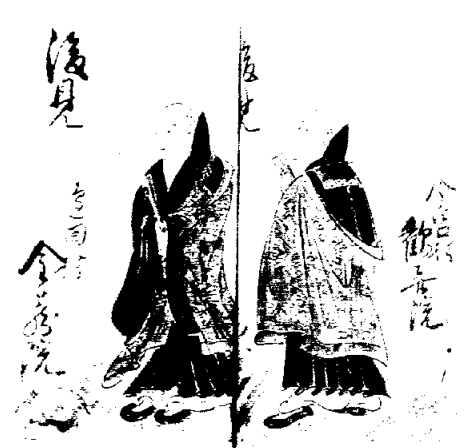
21



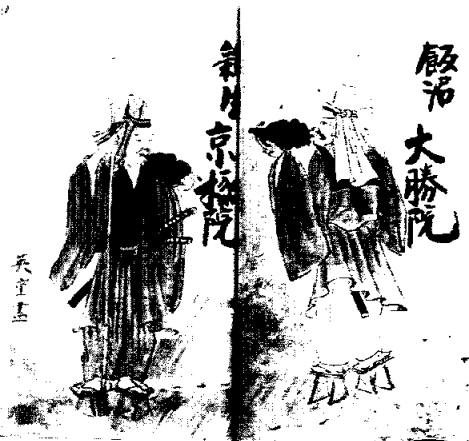
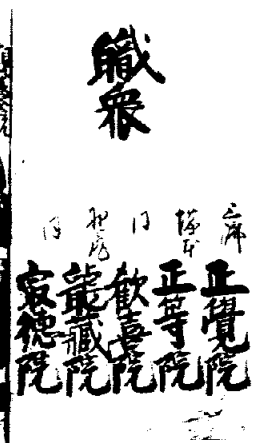
24



23



乃唐書云石符唐 乃光院
 中
 寶藏院
 觀行院
 地藏院
 正等院





三

由 人
建之



初出

日本堂之別名は建之助と云ふ
此堂の大所なりといふは其の
あしそのはし見ゆべしと云ふ
行状

三



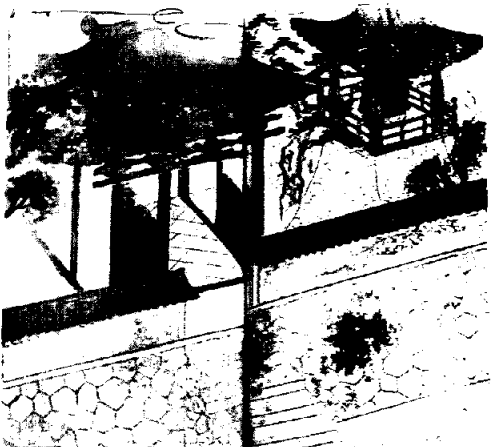
別名は建之助
其の境月入山門
色川

三

行烈薬園
村方没人中



三



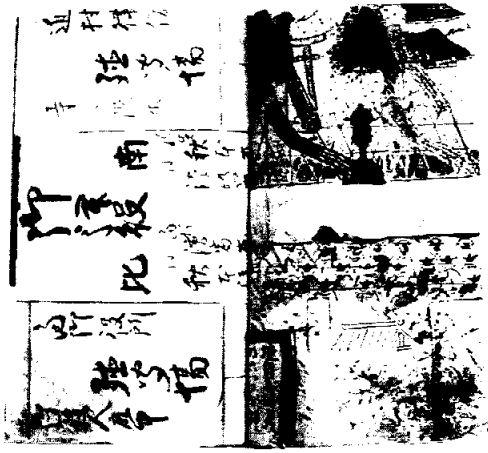
三

仲棟之屋

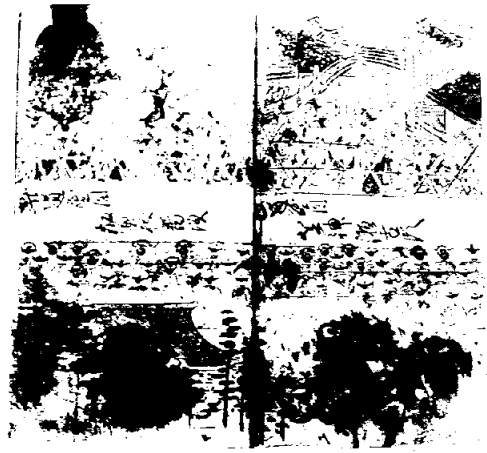
馬場下 馬次
龍源寺 馬次
南流寺 馬次
西流寺 馬次



三



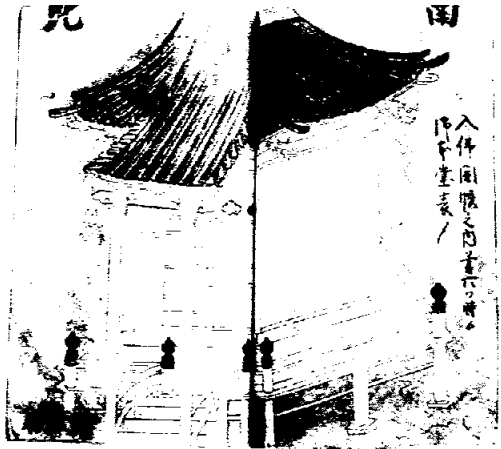
二二



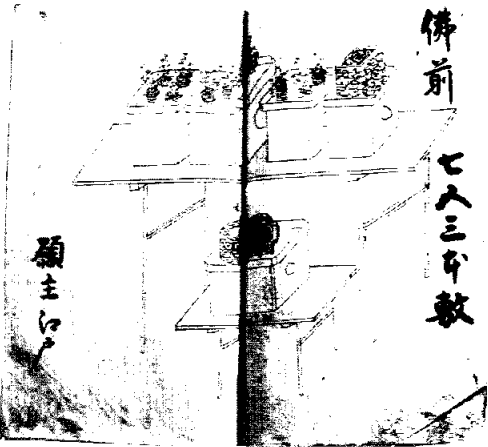
二三



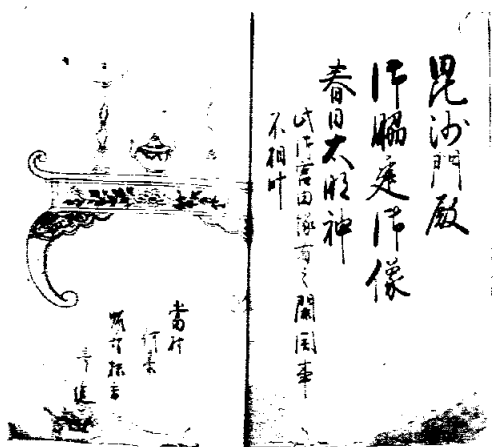
二四



二五



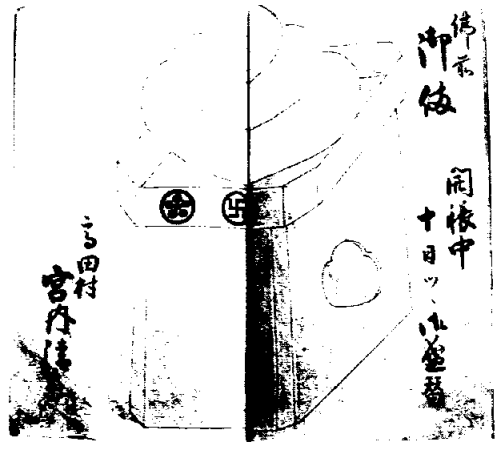
二六



二七



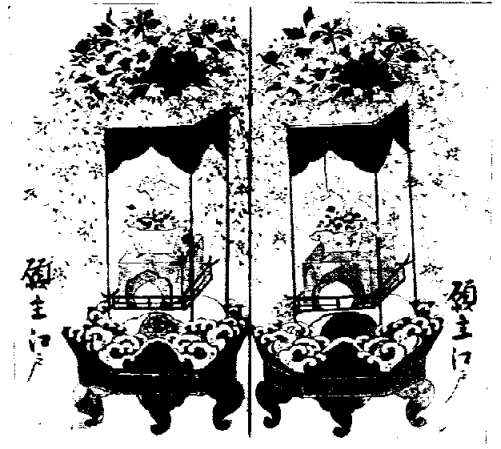
三



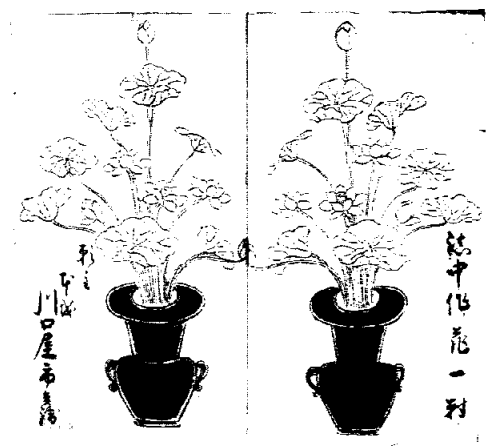
三



三



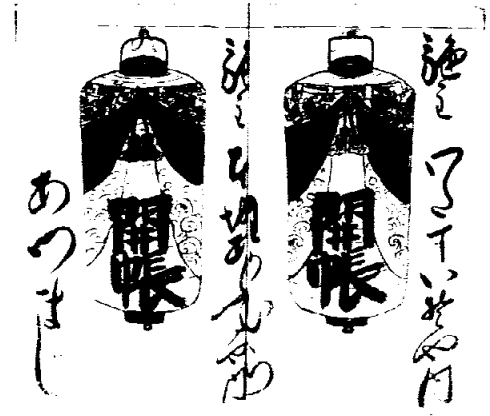
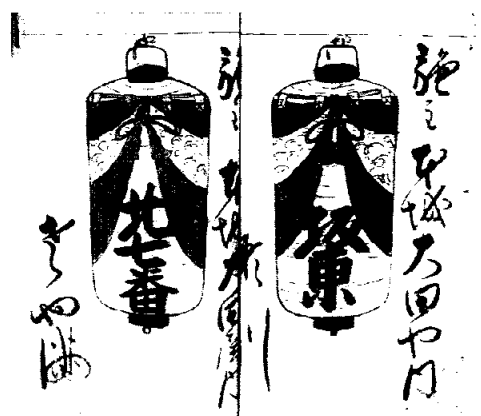
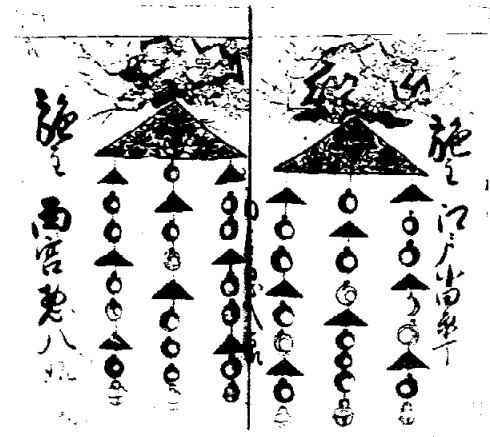
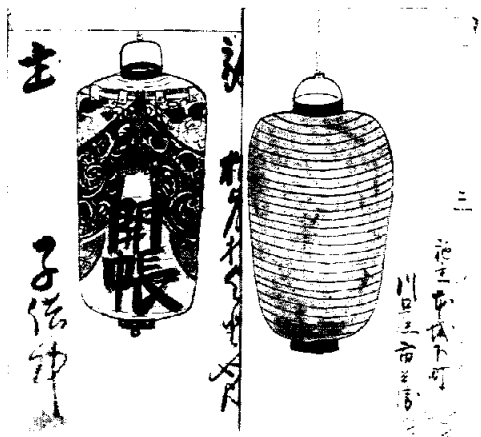
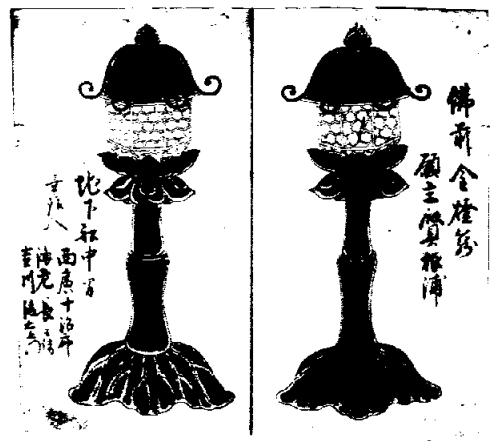
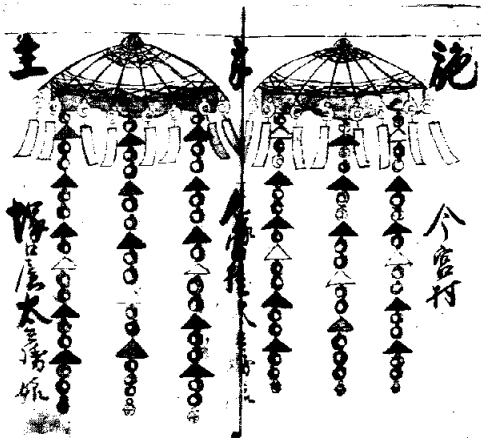
三



三

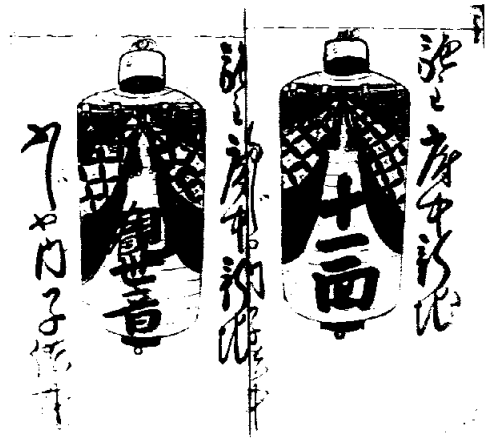


三

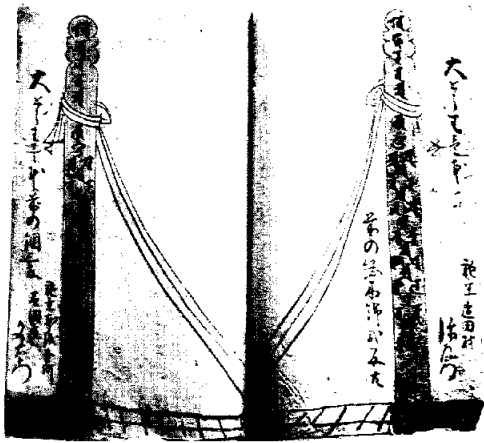




152



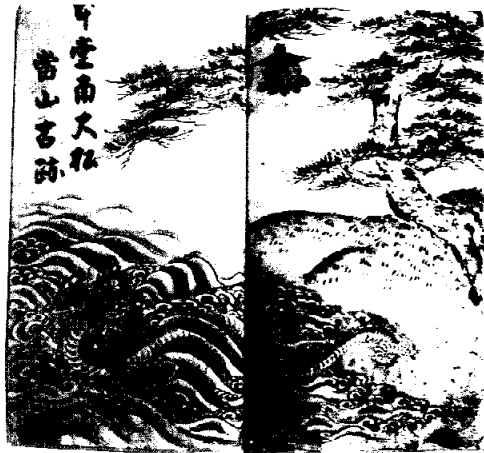
153



154



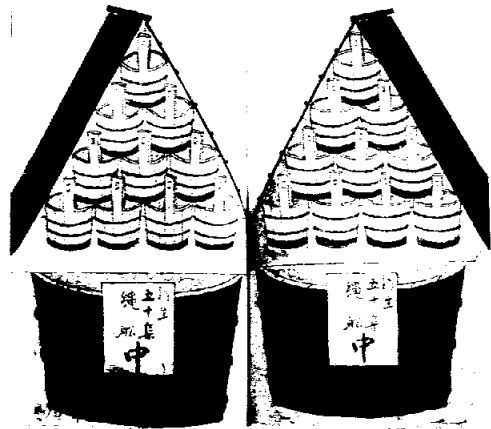
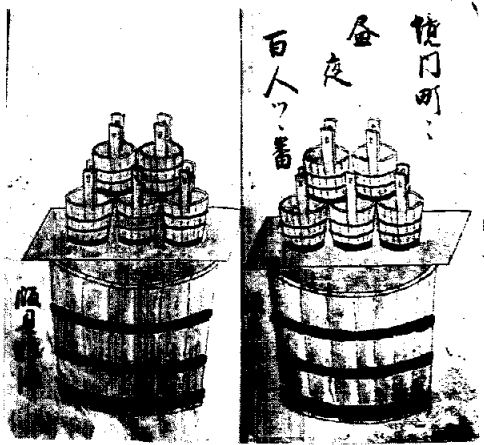
155



156

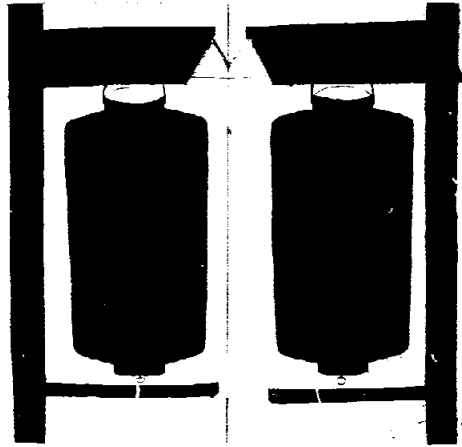
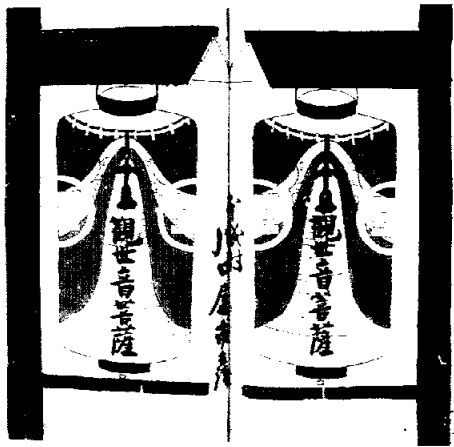


157



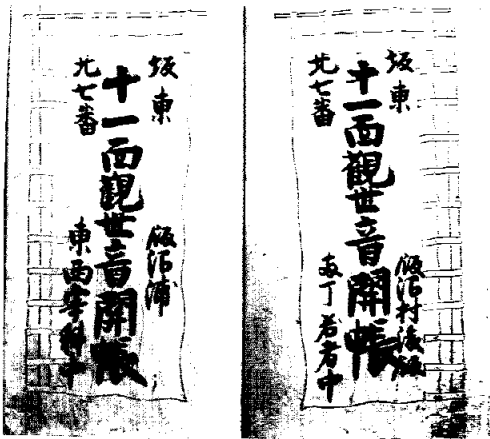
一

二



三

四



五

六

